資料

（令和六年一月）

第六十八回「合宿教室」（主会場・地方会場）感想文集

――日本人としての自覚をもとめて――

公益社団法人　国民文化研究会

第六十八回「合宿教室」（主会場・地方会場）参加者の感想文と短歌詠草

主会場

と　き　令和五年九月一日（金）から三日（日）まで二泊三日間

ところ　東京都八王子市「大学セミナーハウス」

参加総数　八十名

地方会場

と　き　令和五年九月十七日（日）から十月二十八日（土）の一日（日帰り）

参加総数　四十六名

目　次

〝はしがき〟に代へて　……理事長　小柳志乃夫…2

主会場大学別その他参加者数と地方会場参加者数　……5

「合宿教室」68年の歩み……6

主会場　「合宿教室」……9

日程表（二泊三日）……10

あらまし……11

走り書き〝感想文〟……23

合宿中に創作された〝短歌詠草〟……55

地方会場走り書き〝感想文〟……64

あとがき……81

〝はしがき〟に代へて

公益社団法人　国民文化研究会　理事長
小柳　志乃夫

本会創立の昭和三十一年に第一回が開かれた学生青年合宿教室は今年で六十八回目を迎へました。近年はコロナ禍の影響で日帰りでの開催など変則化してをりましたが、今年は、日帰りコースを設けつつも、四年ぶりに二泊三日の宿泊研修を行ふことができました。これによって相互の交流と学びが深まったことはありがたいことでした。（なほ、前年同様に地方会場で、常設の研修会をベースに主会場のメインの講義の録画視聴を柱にした研修の場をもちました。）

今回の合宿教室では、メイン講師として、筑波大学名誉教授の竹本忠雄先生をお招きし、「大和心のかたちと秘密―現代文明の変貌に真向かいて―」と題してご講義をいただきました。

竹本先生は九十一歳のご高齢ですが、そのお話は詩的で美しく、また、奥深い内容のものでした。先生は上皇后陛下美智子様の御歌などを通して、日本人の物の見方や死生観についてお話になりました。「いのちの終はりは無ではなく光である」「死ぬことを隠れるといふ。それは、いつかまた顕れないとはかぎらない、といふ意にもなる」・・かうしたお言葉を通して、生者と死者が断絶されない、日本文化の特質が明らかにされたのでした。和の

上に成り立つ日本文化に対して、西洋文明は闘争と断絶から成り立ってゐて、その西洋文明が今や行き詰まってゐる、といふ先生のお話は日本文化の世界的な意義と使命をお示しになったのでした。

一方、現在の日本をみますと、この大和心の特質である和合の世界をむしろ壊さうとする勢ひが日に日に増してゐる状況です。社会的には少子化の問題は深刻で、さらに夫婦別姓や性自認の問題など家族の存続の土台を崩して、個人にバラバラに解体しかねない動きが、むしろ強まってゐます。その動きは理念先行で、闘争と断絶からなる西洋文明の色彩が色濃く感じられます。

竹本先生のあとに登壇した小島尚貴講師は、自身が命名した「自損型輸入」、即ち国内メーカーの国内向け製品を、日本の輸入業者が海外の労働力を使った安価な現地生産によって〝コスパ商品〟として日本に輸入し、その輸入業者の利益を拡大させる一方、日本の生産者に死活的損害を与へるといふ構図を提示し、コスパ商品の隆盛が国内の経済的活力喪失の一因となったことを述べて、自ら推進してゐるこれへの対応策を示していただきました。かつて、近江商人には、「売り手よし」「買い手よし」「世間よし」といふ「三方よし」の考へがあったと聞きますが、利益追求に走る自損型輸入業者には、「世間よし」といふ共同体意識を失った現代企業の一面が浮き彫りにされてゐるやうです。

現代日本に生きる我々日本人は目に見えるものばかりを追ひ求めるうちに、目に見えない大切なものを失ひつつあるのではないか。合宿教室が取り上げ続けてきたのは、この目にみえない心の問題でした。それは全ての講

義に通底してゐたものでした。短歌の創作と相互批評は、この目に見えない心といふものを自身が見つめ直し、さらにお互ひに思ひ合って、そこに不思議な共感の場を生むものでありました。

かうした目に見えない心の交流は、祖先の残した言葉を通して、祖先と我々の間にもなされうるのであって、目に見えない大きな国のいのちの中に活かされてゐる自分を知ることにもつながります。「日本人としての自覚をもとめる」合宿の意義がそこにあります。

二泊三日の短い合宿でしたが、最終日の全体感想自由発表では参加学生から、つぎつぎに素直で力強い発表が聞けました。主催者としては実にありがたい時間でした。その感想の内容は合宿の帰り際に「走り書き」で書かれて、この感想文集となりました。十分に意を尽くしたものではないかもしれませんが、各参加者の率直な思ひを書き留めて頂いたものです。各地方会場の感想文も合せて掲載してをります。ご精読いただければ幸ひに存じます。

合宿後の内外情勢は、ウクライナ戦争の長期化に加へてハマスのイスラエル襲撃、中国の覇権主義のさらなる高まり、一方で国内政治の混迷と、不安定な要素を増大させてをりますが、この危ふい状況に日本が対処する根本の力は、この合宿に提示された本来の大和心を、国民の中に取り戻すところに求められるものと思ひます。

最後になりましたが、この合宿教室を実施するにあたり、今年もまた、各界からお寄せいただいたご支援に対し、会員一同に代り、心より厚く御礼申し上げます。

第68回全国学生青年合宿教室（主会場）（令和5年9月1日～3日）
東京都八王子市「大学セミナーハウス」

主会場「合宿教室」参加者

（学生班）（算用数字は参加学生数）

東京大学1　上智大学1

日本大学1　電気通信大学1

京都女子大学1　関西外国語大学1

福岡教育大学2　中村学園大学1

福岡大学1　長崎大学3

University of Stiring UK 1

計　十四名（うち女子六名）

（社会人参加者）十四名（うち女子八名）

（国民文化研究会）四十八名

（その他）四名

総計　八十名

地方会場（録画利用）参加者

関西・福岡二会場・長崎・熊本

総計　四十六名

―「合宿教室」68年の歩み ―

回数	年　度	開催地	参加人員	主　　要　　講　　師
1	昭和31年	霧　島	92	広田洋二・瀬上安正・川井修治
2	〃 32年	福　岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野　晃
3	〃 33年	佐　賀	72	勝部真長・木下　彪・森　三十郎
4	〃 34年	阿　蘇	160	花田大五郎・中山　優・野口恒樹
5	〃 35年	雲　仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲　仙	208	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿　蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲　仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜　島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大　分	215	岡　潔・花見達二・木内信胤
11	〃 41年	雲　仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川　尚
12	〃 42年	阿　蘇	336	林　房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧　島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿　蘇	403	岡　潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲　仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧　島	302	村松　剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿　蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡　蘭成
18	〃 48年	雲　仙	433	村松　剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧　島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿　蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松　剛・木内信胤
22	〃 52年	雲　仙	332	木内信胤・衛藤瀋吉・高木尚一
23	〃 53年	阿　蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧　島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲　仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	〃 56年	阿　蘇	353	齋藤　忠・村松　剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧　島	321	齋藤　忠・黛　敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲　仙	327	齋藤　忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿　蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿　蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島　原	294	江藤　淳・村松　剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿　蘇	269	小堀桂一郎・鈴木　一・關　正臣
33	〃 63年	島　原	227	児島　襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島　原	204	村松　剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿　蘇	204	黛　敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚　木	239	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
37	〃 4年	阿　蘇	257	村松　剛・平川祐弘・奥冨修一
38	〃 5年	厚　木	271	村松　剛・佐伯彰一・白濱　裕
39	〃 6年	阿　蘇	253	徳岡孝夫・小堀桂一郎・絹田洋一
40	〃 7年	厚　木	240	小川三夫・長谷川三千子・東中野修道
41	〃 8年	阿　蘇	171	竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊
42	〃 9年	厚　木	213	西尾幹二・竹本忠雄・酒村聰一郎
43	〃 10年	阿　蘇	193	小堀桂一郎・徳岡孝夫・志賀建一郎
44	〃 11年	富　士	178	井尻千男・長谷川三千子・山口秀範
45	〃 12年	阿　蘇	154	小堀桂一郎・東中野修道・布瀬雅義

回数	年　度	開催地	参加人員	主　　要　　講　　師
46	平成13年	富　士	150	伊藤哲夫・長谷川三千子・今林賢郁
47	〃　14年	江田島	244	中西輝政・小柳陽太郎・名越二荒之助
48	〃　15年	富　士	171	小堀桂一郎・伊藤哲夫・占部賢志
49	〃　16年	阿　蘇	170	中西輝政・小田村四郎・石村善悟
50	〃　17年	伊　勢	219	長谷川三千子・松浦光修・山内健生
51	〃　18年	霧　島	191	井尻千男・占部賢志・山内健生
52	〃　19年	奈　良	180	小堀桂一郎・小川三夫・小野吉宣
53	〃　20年	伊　勢	150	伊藤哲夫・占部賢志・岸本　弘
54	〃　21年	厚　木	160	長谷川三千子・ペマギャルポ・占部賢志
55	〃　22年	阿　蘇	151	中西輝政・志賀建一郎・國武忠彦
56	〃　23年	江田島	141	小堀桂一郎・山内健生・廣木　寧
57	〃　24年	阿　蘇	152	竹田恒泰・小柳志乃夫・今林賢郁
58	〃　25年	厚　木	142	伊藤哲夫・國武忠彦・山口秀範
59	〃　26年	淡　路	108	中西輝政・小柳左門・岸本　弘
60	〃　27年	富　士	115	長谷川三千子・小柳志乃夫・國武忠彦
61	〃　28年	福　岡	74	今林賢郁・山口秀範・廣木　寧
		富　士	69	石平・今林賢郁・伊藤哲朗
62	〃　29年	福　岡	83	山内健生・小柳左門・内海勝彦
63	〃　30年	福　岡	53	折田豊生・廣木　寧・與島誠央
		富　士	63	江崎道朗・國武忠彦・青山直幸
64	令和元年	葦　北	48	伊勢雅臣・小柳左門・今村武人
		柏	77	伊藤哲夫・山内健生・西山八郎
65	〃　2年	長　崎	145	小柳左門・池松伸典
		熊　本		小柳左門・伊勢雅臣
		福　岡		山口秀範・中島繁樹
66	〃　3年	東　京	131	江崎道朗・伊勢雅臣
		東　京		鵜野光博
		関西地区		絹田洋一・庭本秀一郎
67	〃　4年	東　京	64	伊藤哲夫・小柳左門
		地方会場	47	録画及び地元講師に基づく研修
68	〃　5年	東　京	80	竹本忠雄・伊勢雅臣
		地方会場	46	録画及び地元講師に基づく研修
累計・参加人数15,802名				

主会場「合宿教室」

第68回 全国学生青年合宿教室 日程表

令和5年9月1日（金）～9月3日（日）

	9月1日（金）	9月2日（土）	9月3日（日）
6:00		起床・洗面	起床・洗面
30			
7:00		朝の集ひ・散策	朝の集ひ・散策
30			
8:00		朝　食	朝　食
30			
9:00		短歌創作導入講義 我が人生の探求と永久生命への投入 小柳雄平 氏	創作短歌全体批評 内海勝彦 氏
30			
10:00		散策・短歌創作	班別短歌 相互批評
30		遂に掴んだ日本経済復活の糸口 小島尚貴 氏	
11:00			
30		班別研修	
12:00	（12:00　受付開始）		
30		昼　食	昼　食
13:00	（13:00　開会）		
30	開　会　式 オリエンテーション	大和心のかたちと秘密 ―現代文明の変貌に真向かいて 竹本忠雄 先生	合宿をかえりみて
14:00	わがごととして考える …国の護りを身近に 神谷正一 氏		全体感想自由発表
30		質疑応答	感想文執筆
15:00		写真撮影	閉会式
30	自己紹介・班別研修		（15:30　解散）
16:00		班別研修	
30			
17:00			
30	夕　食（17:30～）	夕　食（17:30～）	
18:00	休　憩	休　憩 （短歌提出）	
30			
19:00	『古事記』冒頭を読む ～見えない世界の扉を開く	「大御宝を鎮むべし」 ～ 歴代天皇の祈り	
30	岸野克巳 氏	伊勢雅臣 先生	
20:00			
30	班別輪読	班別研修	
21:00			
30			
22:00	入浴・休憩	入浴・休憩	
30			
23:00	就　寝	就　寝	
	消　灯	消　灯	

〔日帰りコース〕

	9月2日（土）
8:00	
30	
9:00	（9：30　受付開始）
30	
10:00	（10：00　開会） オリエンテーション
30	遂に掴んだ日本経済復活の糸口 小島尚貴 氏
11:00	
30	意見交換会
12:00	
30	昼　食
13:00	
30	大和心のかたちと秘密 ―現代文明の変貌に真向かいて 竹本忠雄 先生
14:00	
30	質疑応答
15:00	写真撮影
30	
16:00	班別研修
30	
17:00	感想文執筆 （17:00　解散）

第六十八回「合宿教室」（主会場）のあらまし

第一日目　（九月一日）

第六十八回全国学生青年合宿教室の《主会場》合宿は、東京都八王子市の「大学セミナーハウス」に於いて開催された。新型コロナウイルス禍が一息つき、三密（密閉・密集・密接）回避の集団の長時間滞在の懸念も軽減され、まだ短期間ではあるが待ち望まれた合宿研修（二泊三日）であった。ただ、これも、全てではなく、社会人参加者の、参加して学びたいが数日となると参加しにくい、といふ事情を考へ合せ、合宿二日目の朝から夕方までの日帰り枠を併設しての開催であった。

また《主会場》合宿の講義は録画の上、竹本忠雄先生、伊勢雅臣先生お二方の講義が《地方会場》（関西、福岡二会場、長崎、熊本の計五会場）で視聴され、集合研修が行はれた。

開会式（九月一日午後一時）

国歌斉唱の後、平時戦時を問はず祖国日本のために尊い生命を捧げられた全ての祖先のみ霊に、一分間の黙祷が捧げられた。

小柳志乃夫理事長は開会の挨拶の中で歓迎の辞を述べた後、昨夕、秋田県在住の須田清文会員から届いた四首の歌を紹介しつつ、次のやうに続けた。

《一首目及び二首目の歌は「父母をしたふ話ゆ国思ふこころ語られし長内先生」「語られる言の葉しぐさになつかしき思ひ湧き来る師の君なりけり」といふものだった。ここでいふ「長内先生」とは、長らく私どもを導いて下さった長内俊平先生（本会の元副会長）のことで、大きな体で実に温かい心を持たれてゐた。時には壇上で大きな声で歌をうたって下さった。先生は学徒出陣で軍隊経験をなさった方だが、当時「滅私奉公」（私を滅して公に尽すこと）が大事だとよく言はれたが、それは間違ってゐる。父母を慕ひ妻

子を思ふ、その私情が国を思ふ心に繋がってゆくといふことを御体験を踏まへて語られてゐた。友からの歌に、そのことが思ひ起されて合宿教室での学びの原点を改めて想起させられた。

後の二首の歌は私を励ますもので、「事しげきさなかにありていかばかりちぢに心をくだきたるらむ」「息すひて信ずることを思ひ切り吐き出したまへますらをの友」といふものだった。父母は、そしてかうした友達は、本当に有難い。そして私達は、この実に有難い国に生れて来たとしみじみ思ふ。

お配りした講義資料によると、今回の合宿では「目には見えないものを感じ取る」といふお話が展開されるかと思はれる。昨夕、開会式での挨拶を想ってゐたその時に前述のやうな四首の歌が友人から届いた。私の心を友達が見てゐたのかと不思議な感じがした。

この合宿では知識を学び語るのは主眼ではない。班員の言葉に耳を傾けつつ互ひに思ひを語り合って、真の友人を見出す二泊三日となるやうに努めていただきたい》

合宿導入講義（午後二時）「わがことととして考へる―国の護りを身近に―」

公益財団法人・合気会　神谷　正一　氏

航空自衛隊生徒（「高校」に相当する）の一年生の時に、授業の一環で陸上自衛隊霞ケ浦駐屯地の資料館を訪ねたが、そこでかつての予科練の生徒たちが書いた特攻志願の自筆の遺書を目にして涙が止まらなかった。航空自衛隊生徒である自分は何とも言ひやうのない重く辛いものを感じたが、同時に誰かがやらなければならない任務を担はうとする覚悟の深さに感動を覚えた。その後の私の自衛官人生の根柢には、この時の体験がある。

二年生の時には、ソ連のミグ２５戦闘機の函館空港への強行着陸事件（ベレンコ中尉亡命事件）が発生

して警戒監視能力の弱点が明るみに出るといふ大事件があった。航空自衛官任官後の沖縄では領空侵犯のソ連軍機に向けて警告射撃をする事案があったが、双方の撃ち合ひにならずに胸を撫でおろしたこともあった。また対北朝鮮では能登半島沖での工作船追尾の「海上警備行動の発令」事案もあった。今、身近にある危機としては、北朝鮮による度重なるミサイル発射、中露戦闘機へのスクランブル発進、尖閣諸島周辺の中国公船による領海侵犯、台湾有事の可能性等々が挙げられるが、未だに「いったい何処が攻めて来るのか？」などと悠長なことを言ふ国会議員がゐる。

現在、ウクライナ国民にとってロシア軍に抗することは、自らのアイデンティティを守る「わがこと」に他ならない。何人も海外に出向く際には身元を保証する旅券（パスポート）が必携であるが、そこには「これを所持するわが国民の庇護を要請する」旨が明記されてゐる。このことは国民は国の庇護の下にあることを示してゐる。

さう考へるならば国の危機をわがこととして捉へることはごく自然なことのはずだ。この合宿の中で提示される課題に「わがこと」として、向き合っていただきたい。

講義拝聴後、班に分かれた参加者は、講義を聞いて気付かされたこと、考へさせられたことは何か、等々について語り合った。なほ班別研修は各講義の後にも繰り返して実施された。

講義　（午後六時三十分）『『古事記』冒頭を読む―見えない世界の扉を開く―」

川越八幡宮　権祢宜　岸野　克巳　氏

小泉八雲に「われわれ自身が一個の幽霊である」といふ文章がある。我々は一個の物質ではなく一個の幽霊にほかならず、およそ不思議な存在であると言ってゐる。小林秀雄に「門を出ると、おっかさんといふ蛍が飛んでゐた」といふ文章がある。終戦の翌年、小林さんの母上が死んだ。ある日、門を出るとおっ

かさんといふ蛍が飛んでゐた。何の不思議もない当り前のことだったと小林は書いてゐる。また岡潔には「私はその人が道元禅師であるとわかった」といふ文章がある。鎌倉時代に生きた道元が、昭和の岡先生に「無言の御説教」を授けてくれたといふのだ。霊から霊への伝達だ。

それでは『古事記』の冒頭から何を読みとることができるか。八世紀の初めに成立（成文化）した『古事記』の全文を大和言葉で読めるやうにしたのは、江戸時代の国学者である本居宣長である。冒頭部の「神々の出現」を宣長はどう読んだか。「天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は天之御中主神、次に高御産巣日神、次に神御産巣日神、次に…」と次々に神々が現れるが、それは同時に一幅の絵画のごとく現れたと説いてゐる。父から子への縦に連なる「次に」ではなく、兄の「次に」弟が生まれるやうに「横の意」であって「皆同時にして、指続き次第に成り坐せる…」とした。神々の現れに時差はないとした。

産巣日は産霊であって、万物ことごとく二柱の産巣日神によって成り出てゐるとした。「むすび」（結び、結ぶ）は日本文化の本質であって、破壊ではなく「結ぶ」ことで新たなものを生み成してきた。その歴史の本質が『古事記』冒頭に示されてゐる。神々の話は生きてゐる。そこには感動があり驚きがあり喜びがあって、恐れもある。

第二日目　（九月二日）

朝の集ひ（午前六時四十五分）

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。朝の清々しい空気を胸一杯に吸ひながら体操を行ひ、その後、御製拝誦を行った。拝誦担当と御製は次の通りである。

九月二日　担当　北濱　道氏

明治天皇御製

古典（明治三十九年）

石上ふるごとぶみをひもときて聖の御代のあとを見るかな

書（明治四十三年）

いそのかみふるごとぶみは万代もさかゆく国のたからなりけり

蟲（明治四十二年）

ひとりして静かにきけば聞くままにしげくなりゆくむしの声かな

九月三日　担当　武澤陽介氏

孝明天皇御製

書（文久三年）

日々日々の書につけても国民の安き文字こそ見まくほしけれ

昭和天皇御製

木（歌會始御題、昭和六十三年）

わが國のたちなほり來し年々にあけぼのすぎの木はのびにけり

短歌創作導入講義（午前八時三十分）「―我が人生の探求と永久生命への没入―」

森林パートナーズ（株）取締役社長　小柳雄平氏

深い感動を言葉にする営みが短歌創作である。『万葉集』巻八の志貴皇子のお歌「石ばしる垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりにけるかも」には、春を迎へた際の歓びが溢れてゐる。千三百年も前に詠まれた

歌だが、この歌を読むとその調べに心が惹かれて、長い日本の歴史に連なってゐる自分を感じる。我が思ひを飾ることなく詠むことは「心の修練」であって、先人の歌を読み味はふことで生命的なつながりを実感すると思ふ。

我々の学びの先輩で、昭和二十年八月二十日未明、敗戦の責めを負って福岡市近郊の油山で割腹自決された寺尾博之さん（海軍少尉）は、出征前に霧島で持たれた友との別れの宴で、「きりしまのいでゆの里に酒くみて語りし今宵とはに忘れじ」と詠まれてゐる。この歌には友を思ふ深い思ひが詠まれてゐるが、その作者の胸中が時の隔たりを超えて読む者の胸に迫って来る。

今上陛下は、皇太子時代に「岩かげにしたたり落つる山の水大河になりて野を流れゆく」といふ御歌を詠まれてゐる。「水」「水上交通」の研究者でもあられる陛下ならではの御歌であるが、歴史につながって生きる人間のことをもお詠みになられてゐるやうにも拝される。遙か遠くの、ひとつひとつの小さな思ひが連なりつながって、大きな生命の大河となって今現在まで連綿と続いてゐると、歴史の大きな流れを詠まれた御歌ではなからうか（講師は、老いも若きも、男も女も、学問の有無も、関係なく等しく「短歌」は詠み継がれて来たと説きつつ、先人の歌を引いて「一首一文」、「体験を具体的に詠むこと」等の短歌詠草の原則を懇切に説かれた）。

会員発表（午前十時四十五分）「遂に掴んだ日本経済復活の糸口」

J-Tech Transfer and Trading（輸出・国際技術移転）代表　小島　尚貴　氏

これまでの二十余年の間の経済記者や貿易実務の経験を通して、気付いたことがある。それは通常の輸入とは違って、国内で生産可能な製品をわざわざ人件費の安い外国で生産し輸入して安価で販売するといふ「価格競争力の獲得」だけを目的とした貿易の存在であった。これは日本人自身が自国の産業を衰退させてしまふもので、私は「自損型輸入」と名付けたが、ここに長引くデフレの原因の一端があることに気付いた。一部の輸入販売業者は巨利を得るが、国全体の利益にはなってゐない。

これを食ひ止めるには日本人を豊かにする会社と商品だけを応援して、全体の利得と調和する消費活動

を盛り上げることが肝要である。例へば日本の輸入業者が栽培技術を教へた中国産の安い藺草で追ひ込まれてゐた熊本の畳業界では成果が出始めてゐるが、自損型輸入を克服するのは簡単なことではない。自力で自損型輸入を抑へて国産品の出荷量、生産者数が上昇に転じたら、それは少子高齢化の克服に道を開くことを意味する。今後、この活動を様々な業界にも広げて、国民が相互に潤ふ結果を出していきたいと考へてゐる。

講義（午後一時）

「大和心のかたちと秘密ー現代文明の変貌と真向かいてー」

筑波大学名誉教授　竹本忠雄先生

今日は普段考へないやうなことを普段考へない角度から考察してみたい。かつて小林秀雄はこの合宿教室で、「お化け」の話をしてゐるが、霊的な事柄は幻想ではなく、見えない世界を見ることは日本人にとって本質的なことと考へてのことであったと思はれる。

皇后宮美智子様（現、上皇后陛下）の多くの御歌には、その本質へと導く鍵が見出されるやうに思ふ。例へば「生命あるもののかなしさ早春の光のなかに揺り蚊の舞ふ」「君と行く道の果たての遠白く夕暮れてなほ光あるらし」の御歌には、尽きんとする命、だが、その先にはほのかな光がある。死の先にあるのは無ではなく光だとの暗示がある。生と死、この世と彼の世、二つの異なる次元が「ほのかな光」といふ転回点で結ばれる。

万葉以来の日本の詩歌には、光、雲、花などの「ゆらめくもの、ほのかな、かすかなもの」が、異なる世界を結ぶ転回点として頻出する。その主たるものは「鏡」であらう。鏡は「影見」である。古代にあっては「水」はわが身を写す鏡（水鏡）であっただけでなく、神仏のかげ（光・影）が顕れるものであった。同時に見る者の胸中をも写しだす。「水鏡する」ことは大きな意味のあることであった。

顕れるものはまた隠れもする。人もまた隠れて顕れる。隠れるとは、古くは死ぬことを意味した。さすれば「顕れる」とは復

活であらう。死と復活、生と死とを二分せず、幽顕の間を往きて還る「往還の思想」は日本文化の特質といへる。西洋には往還の思想はない。往きし者は還らず、復活はキリストにのみある。

西洋の文明は闘争と断絶から成り立つ。黙示録の神話がすでにさうであった。闘争を繰り返して来た西洋の歴史は神話の反映とも言へる。現今の戦争も神話の反映ではないか。黙示録は、究極における神の勝利を語るが、それは同時に世界の終りでもある。一方、わが『古事記』には「幽顕出入」の語があり、幽と顕とのかかはりは、日本神話の主題でもある。争ひを超えて成り立つのが「大和心」であらう。

現代は断絶の時代である。しかし、それをどう超えようかで、いま文明は変貌の時を迎へてゐる。大きな転換が起きつつある。この時にあって、生死を超えて往還する「大和心」に視線を注ぐべきではなからうか。かつてマルローは「人生は何ものにも値ひしない。しかし、人生に値ひする何ものもない」と言った。めいめいの「水鏡」を持たねばならない。

講義（午後六時三十分）

「大御宝を鎮むべし―歴代天皇の祈り―」

筑波大学非常勤講師　伊勢雅臣先生

日本には人と物とのすべてを敬ふ文化がある。日本神話からそれが浮び上がって来る。また縄文文明の遺跡や出土品からも、緻密な自然観察と工夫によって世界最初の定住生活を実現した古代人が「生きとし生けるもの」すべてを神の分け命と考へて、感謝し敬ってゐたことが偲ばれる。

天照大神が「是の物は、顕見しき蒼生の、食ひて活くべきものなり」と人々の食べ物を見つけて喜ばれたといふ神話からは、深い慈しみの精神が感じられる。これが受け継がれて、初代の神武天皇の建国の詔には、「元々を鎮むべし」（大御宝を鎮むべし）とあって、国民（大御宝）を大きな家族の一員として安寧に暮らせる国づくりを志されたことが伝へられてゐる。

聖徳太子の十七条憲法には、上下の者が睦まじく論じ合ふことで物事の道理が見出せることが説かれてゐる。また役人が勝手に税をむさぼり取ることを戒められたことが記されてゐる。聖武天皇は民が互ひに思ひやる心で支へる国を実現しようと、廬舎那仏造営事業を興された。大仏造立の詔によれば、「一枝の草、一把の土」でも協力したいといふ者には無条件でそれを許せと役人に命じられてゐる。

今上陛下は東日本大震災の復興状況をご視察の折に「復興の住宅に移りし人々の語るを聞きつつ幸を祈れり」とお詠みになった（平成二十九年十一月）。かうした「国家国民の安泰と幸ひ」を祈られる御心は、今上陛下まで一貫して仰がれるところである。

第三日目　（九月三日）

創作短歌全体批評（午前八時三十分）

元（株）IHI　内海勝彦氏

この合宿では創作した短歌を相互に批評し合って、より正確な表現になるやうに努めることに重きを置いてゐる。それは、相互批評を通して、心と心の交流を実現するためでもある。詠む時は日常語（口語）では切実な感動を表現できないので、できるだけ文語を使ひたい。三十一文字といふ限られた字数の中でさまざまな思ひを正確に表現しようとすれば、口語よりも少ない字数で済む文語が適してゐる。例へば、過去推量の助動詞「けむ」を使へば口語の「だったのだろう」に対して五文字も減らせるのだ。歴史的仮名遣ひによる添削の例も示したが、文語表現によく調和するからだ。もともと短歌は文語定型詩だ。

提出された歌の中には、男子学生の「先人が紡ぎ護り来しこの国を我も護らん防人になって」と今後の決意を詠んだものや、女子学生の「解のない問題を深く考えて悩むことから始まる学び」といふやうに、この合宿をこれからの学びの契機にしようとするものなど、素直な気持ちを詠んだものが多かった。この後の班別相互批評の時間では、相手の身になって、何を言ひたいの

か、どうしてこの表現になってゐるのかをよく理解し合ひながら、より適切な表現となるやうに取り組んでほしい。

閉会式（午後三時）

滞りなく全日程を終了して、閉会式を迎へた。国歌斉唱の後、閉会の挨拶に立った池松伸典副理事長は、参加者の協力に感謝しつつ、次のやうに述べた。

《先ほどの「全体感想自由発表」をお聞きして、皆さんが、真剣に前向きのお気持ちで、この合宿に取り組まれたことが伝はってきて本当に有難かった。お蔭で中味ある充実した合宿になった。講義の中の「ひとつの言葉」をしっかりと心にとどめて、将来あの時のあの言葉の深意はかういふことだったのかと思ひ起されることもあらうかと思ふ。心に満ちた学問とはさういふものだと思ふ。

竹本忠雄先生の御講義からは、後進に日本の国を繋いでいってもらひたいとのお気持ちがひしひしと伝はって来た。ご高齢にも関はらず二時間もお話し下さった。これまで日本の姿を世界に発信して来られた先生は、今でも発信を続けられてゐる。そして毎日原稿をお書きになってゐるとお聞きしてゐる。先生のお姿から、さういふ学問を続けることの大切さを痛感させられる。これから海外に出る人もゐるはずだが、この合宿で気付かれた「日本の学問」を持ち場持ち場で広げて行くことの大切さを先生のお姿から感じ取られたことだと思ふ。

まもなくして、それぞれの日常に戻られるが、そこでの取り組みこそが大事になる。われわれは、首都圏でも関西でも九州でも、定例の勉強会、読書会を続けてゐる。オンラインによるものもある。とにかく定期的に続ける、中断することなく実行することが大事であって、日々の生活の中で考へ続けることで、単なる知識ではない身についた学問になるはずだ。ご参加を機縁に、交流を密にして勉学を深めていきたい》

合宿運営

【本　部】

運営委員長　若築建設(株)　池松伸典
(株)アイセルネットワークス　最知浩一
元(株)アルバック　北濱　道

【事務局】

事務局長　国民文化研究会事務局長　内海勝彦
国民文化研究会事務局　飯島隆史
国民文化研究会職員　栗方惠美子

走り書き〝感想文〟

これは閉会間ぎはの短時間で参加者に、合宿中の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のままで掲載してあります。

第一班

仕事、学問、人生をどう融合させていくか

（東洋紡（株）　庭本秀一郎）

ここ十年ほど、私自身にとって、仕事、学問、人生をどう融合させていくかといふことは、切実な問題でした。神谷正一先生は、ご自身の具体的な職務のご体験と、日本を取り巻く国際情勢とを重ね合せながら、お話しくださり、ウクライナの戦ひは「わがこと」と仰いました。小島尚貴先生には、ご職業を究めようとされる姿勢をひしひしと感じただけではなく、国民としての筋を通すことを軸に据ゑ、それを生活に身近な、経済活動の連鎖を作っていかうとされる強い意志を感じました。私自身も学問を生活の一部にしたいと強く思はされました。

この合宿教室を通じて、私は、仕事や生活が学問そのものであり、また学問が仕事や生活と離れないやうな、そういふ人生にしたいと、自分の問題意識が更新されるやうな思ひになりました。

上皇后陛下の御歌を班で読み味ひて

感想を言ひあふ内に御歌なる優しき姿感じられけり

竹本忠雄先生のご講義の内容は素晴らしいものだった

（作曲家　武澤陽介）

私も歳を重ね、それなりに学びを継続してきたが、日本とは何か、大和心とは何なのかという根本的な理解が出来ていないように感じていた。今回の合宿教室では私が学生時代に何度も暗い道を照らされた本の著者である竹本忠雄先生が講師で来られると知り、ずっと合宿の日が待ち遠しかった。

ご講義の内容は素晴らしいものだった。先生の深い知性と感性により、大和心のフォルムが鮮やかに浮き彫りになるような時間だった。私はこの感動を生涯忘れることがないだろう。この思いを胸に抱き、明日からも学びを続けていきたい。夜も更けて膝を交へて語り合ふ友の言葉に心打たるる

感性を研ぎ澄ましたい

（関西外国語大学　四年　蜂谷　翔）

竹本忠雄先生がおっしゃった「今の世界は唯物主義である。これをつき崩すのは容易ではない」というこの言葉が今回の合宿をうける上で自分のテーマであったような気がします。目に見えるものが全てで言葉に力がない昨今、言葉の真意をここまで奥深くさぐることができる場は中々ないと実感しました。

今回の3日間、日本人として心を働かせつづけることがどんなに大変で、どんなに素晴らしいことかを学ばせていただきました。小柳雄平先生は和歌を「心の修練」とおっしゃったように、言葉を紡ぐのは一日、二日でできるようになるものではないし、「感じる」ことそのものも心を、感性を研ぎ澄ましておかないといけないのだなと思いました。

短歌創作の意味を知った

（福岡大学　経　三年　阿部遥人）

日本は島国で隣国と接していませんが、隣国との問題は他人事ではなく、すぐそこに迫っている事を学びました。仕事と人生互いに一貫性のある国を造る大人に成りたいと感じました。文化を学ぶ事は自分の身を守る事、愛する祖国を守る事、未来を創る事であると学びました。

短歌の創作は今の人生の課題をそのまま反映させる様な形になり、大和の良さを知る事ができました。まず感じる、そして、何を感じ自分の心がどの様に変化しているかを理解する、最後にそれを清く表現し何度もくり返し修正する、この流れこそ自身の感情に磨きをかけ、自身を理解する事であると知りました。

カメラ・レポート1

開会式。小柳志乃夫理事長は、「この合宿では知識を学び語るのは主眼ではない。班員の言葉に耳を傾けつつ互ひに思ひを語り合って、真の友人を見出す二泊三日となるやうに努めていただきたい」と挨拶された。

難解なものを感じ取れるよう精進したい

（東京大学　教養　一年　大迫泰生）

今日の小島尚貴先生の話にしろ、竹本忠雄先生の話にしろ、日本人として日本の文化伝統を存続させることが重要であるという気持ちが根底にあるというように感じた。小島先生の話では、日本の企業のコストパフォーマンスを求めすぎる姿勢が日本を貧しくしているという発見に驚いた。価値あるものには相応の対価を払うことが大事であることは最近私も実感していたが、日本社会を維持再発展するという観点において、消費行動を見直す必要があるなと考えさせられた。消費者主体で経済を健全化していく取り組みに協力したいと感じた。このように多くの感想を持てる程理解できた小島先生の講義に対して竹本先生の講義は、自分にとって、少し難解なものであった。大和心や短歌の言葉選びの奥深さ、ヨーロッパの歴史的思想など講義は多岐に渡っていたが、自分の理解が及んでいなかった。そのような難解なものや芸術作品の奥ゆかしさを感じ取れる人間になれるよう精進したいと思う。

言の葉に宿りし思ひ受け継ぐは大和心の真髄なりけり

消費者意識の改善が一番問題だ

（電気通信大学　情報　一年　大部友暉）

近年成長しない日本経済復活には、国産のものを消費することであり、低価格・品質より重視すべき観点である。だがしかし、今現在の賃金で、衣食住の避けられない消費に対しての出費が大きくなるのは、大半の人が嫌がるだろう。この消費者意識の改善が一番の問題である。小島尚貴さんは心に日本経済成長という固い軸があるように感じて、言いたいことを言わない日本人の意識を変えるべきとおっしゃっていた。

三日間の濃縮された精神生活

（中村学園大学　流通　一年　本間史久馬）

不安でいっぱいになりながらここに来ました。三日間の濃縮された精神生活は久しぶりの事であり、講義と研修の繰り返しで容易ならざる事でしたが、反面大変充実したものでした。また。短歌を書くのは小中学校以来で、また、私の心が動かないこと、表現方法のまずさから班別研修では時間を取らせてしまいました。閉会式であったように学びを継続し、決して足を止めないということを大切にして学生生活に戻り、そこで生かしていきたいと思っております。

上皇后陛下の御歌が印象に残った

（長崎大学　教　四年　安永彩夏）

今回の合宿を通して、自分とは遠いと切り離してしまいそうになることも、わがこととして考えようと、身近に考えよ

うと努力していくことが大切なのだと感じました。先人の方々は自分の感じたありのままを言葉にしようと、和歌にしようと努力されてきたのだなと感じました。

上皇后陛下美智子様の御歌を偲んでいくなかで、どういうお気持ちで詠まれたのだろうかと、そこを感じ取ろうとすることはとても難しかったのですが、どの御歌にも相手のこと他のことを信じようとされている御心を感じました。「君とゆく道の果たての遠白く夕暮れてなほ光あるらし」という御歌が印象に残っています。竹本忠雄先生のお話を聞いていくなかで、上皇陛下と歩んでいく道のなかで、どんなに苦しいことがあろうとも光はあるのだと、希望はあるのだと強く信じられているのだなと思いました。竹本先生が、結ぶということも言われていて、少しでも目の前の相手のこと、他のことに近づこう、結ぼうと努力していきたいと、そのような姿勢が日本人として生きていくことになるのかなと思いました。

信じがたきものを信ぜむと努力して日本人として生きてゆきたし

「大和心」の大切さを感じた

（京都女子大学　文　三年　板西清香）

一日目の神谷正一先生、二日目の小島尚貴先生の講義を聞き、自分の身の周りのことは全て「わがこと」だということを改めて感じました。国防のことや経済のことは自身の普段

カメラ・レポート2

合宿導入講義。公益財団法人合気会 神谷正一氏は、旅券（パスポート）には、国民が国の庇護の下にあることを示す文言がある。国の危機をわがこととして捉へることはごく自然なことのはずだ。この合宿の中で提示される課題に「わがこと」として、向き合っていただきたい、と述べられた。

の生活からは遠いもののように感じ、わがこととして考えるのを忘れてしまうことが時々あります。しかし、遠いもので関係のないもののように思えるものでも全てわがこととして考えることが大事なのだと思いました。

岸野克巳先生と竹本忠雄先生のお二方のお話を聞いて私が感じたのは「大和心」の大切さです。日本には日本人しか持っていない大和心があります。その大和心を大事にすることが日本の平和に繋がるのではないかと思いました。西洋には西洋の考え方や感じ方があり、日本には日本の考え方や感じ方があります。国によってそれぞれであるため、その国にあった考え方をするのがその国の平和に繋がるのだと思いました。

大きく二つの事を感じた

(University of Stirling UK　一年　永安愛海)

この合宿を通して感じた事は大きく分けて二つあります。一つ目は、たとえ内容・役割・分野が違っても皆様が思っている事の最も大切な事は同じで、又分野の違う関わりのない分野でも、一つの事を考え合い知識を出し合う事は、本当に大切でかけがえのない事だと、心の底から感じました。

二つ目は、考えを持ち、自主性を持ち、疑問を持つという事がとても大切だと感じました。何にでも疑問を持ち考える、それを話し合う、この行動は人間としての素晴らしい役割だと思ってこの合宿に参加しました。皆違った意見を持ち、感性、感覚、その事を共有できるこの場は、有難く、一秒一秒を大切に味わい、友として分かち合う、とても良い環境だと感じました。

私にとって、海外に身を置く私にとって、この合宿はとても価値のある素晴らしい合宿でした。

充実した合宿であった

(戸田建設(株)　青山直幸)

今回の合宿は、久し振りの二泊三日の合宿で、充実した合宿であった。様々な分野の講師陣による多彩な内容であったが、振り返ってみると、共通の問題意識があり、統一感のある合宿であった。古来、日本人が大切に守り育てて来た価値観(目に見えない不可思議なるものを信ずること、生死をつなぐ死生観、天皇と国民(大御宝)との信頼関係等)を再び見直し、発掘し、現在社会が忘却したものをよみがへらせて、本来の日本のあるべき姿に回復してゆくこと、をこの合宿で共有し、確認できたのではないか。さうした意味で、竹本忠雄先生のご講義は、実に深遠で、重要な意味を持つ、歴史的な講義であったと思ふ。

運営について、日帰り参加者が、班員にうまく溶けこめるか心配であったが、一班では、すぐに班員と交流を図り、溶け込んでゐたので、安心した。

全体感想自由発表にて
次々に壇に登りて合宿で感ぜし思ひを語りゆきけり
合宿に参加せしことの喜びを笑みたたへつつ話す若きら

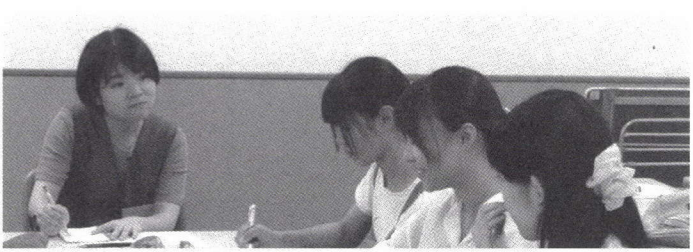
内容が充実していた

（元 関西熱化学（株） 天本和馬）

二泊三日の短い日程であったがよく練られた構成であったと思う。特に竹本忠雄先生の講義は内容が充実し、先生のこれまでのご思索の結晶であったと思う。すぐには理解できない先生なりの結論、エッセンスを語られ、これからこれの消化をしていかなければならないと思う。特に上皇后陛下の御歌を紹介されつつその調べの中に生と死、現在と過去の歴史とこれからの行末をしのばせられるお言葉がつづられていると感じた。それらのお言葉はこれまで日本人が考え積み重ねてきた伝統の上に表現されていると思った。とりわけ、水鏡の比喩は鮮烈であった。小林秀雄さんや岡潔さんが一瞬ですべてをわかるという経験のご紹介はよくわかったし、鏡に込めた古代日本人の思いも納得できた。こうして私なりに理解できるということが日本人の証でありうれしく思った。同じようなことを多くの学生さんが述べてくれたことをうれしく思い強いつながりを感じた。

班別討論の場は楽しく時間が経つのを忘れるほどであった。前向きで素直な学生が多かった。また日本をグローバルな視

カメラ・レポート3



班別研修。講義拝聴後、班に分かれた参加者は、講義を聞いて気付かされたこと、考へさせられたことは何か、等々について語り合った。

点からとらえようとする視点にも感心した。

君民唱和の国柄を守りたい

（全日本学生文化会議　清川信彦）

神谷正一先生の合宿導入講義を受けての班別研修で、班長の庭本秀一郎さんに「神谷先生は『あなたにとって国の守りとは何か』を投げかけられた」と言われたとき、自分にとっての国の守りがすぐに言葉にできない自分に気づき、国ということを概念的に捉え、わがこととして考えられていないことを省みました。今回の合宿を通して「自分にとっての国の守り」を実感ある言葉にしていこうとの思いで受講した。

そのような中で二点心に残ったことがあった。一つは上皇后陛下の「生命（いのち）あるもののかなしさ早春の光のなかに揺り蚊の舞ふ」との御歌である。成虫になって数日しか生きることができない小さなユスリカのはかない生命、精一杯生きる姿に御心を寄せられ、その御心を繊細に言葉で表現しておられる。このような心の働かせ方、丁寧な言葉の使い方によって自らの感動が正しく認識でき、自身の人生を「わがこと」として生きることができるのだと思った。もう一点心に残ったのは、昭和天皇の戦災地視察の二首の御製である。

わざはひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ

國をおこすもとゐとみえてなりはひにいそしむ民の姿たのもし

昭和天皇が「うれしとぞ思ふ」という極めてストレートな表現で、国民へのお気持ちを伝えられ、国民もまた「國をおこすもとゐ」として必死の努力で陛下にお応えする。このような君民唱和の国柄を守ることが日本を守ることであり。私が守っていきたいものであると心から思った。

このような君民唱和の国柄を守るために私が日々できることは、まず、歴代天皇や今上陛下の御製を拝し、その御心を正しく受け止め、感動を伝えていくことである。とても地道な営みであるが、この積み重ねこそ「自分にとっての国を守る道」であると信じて、日々努めていきたい。

第二班

歴史と伝統の重みを実感する機会となった

（日本大学　法　四年　清水陽平）

私は竹本忠雄先生のお話の中で、「隠れる・顕れる」と云う日本人の死生観の素晴らしさに感動した。天照大神の天岩戸の神話にも有る様に、「鏡」を通して日本人は映された己の姿を真なるものと信じ、そこに「かしこき」ものを感じた。また、「隠れる・顕れる」すなわち、若し一度生命を喪ったとし

ても再び甦る、まさに回復をするという、生命の循環という考えが有るからこそ、後に続く者を信じ、自身も何度でも祖国日本に生れ帰り、国に尽くすことが出来ると確信されたのだと拝察した。

また、神谷正一、小島尚貴両先生のお話を伺うなかで、現実の危機や問題に相対し、まさに目の前に有る不正義に抗し、努力されている日本人の姿を感じることが出来た。私は当初小島先生の「自損型輸入」について、その対策法として、国産品のみを尊ぶ姿勢、これは排外・統制であり、自由経済に反するのではないかと考えた。しかし、先生が「実際に行動しなければ知識ではない」と仰り、何を守らなければならないのか、確り消費者側の思索、考える事が大切だと受け止めた。結論では無く過程を確り見て、こういった問題を考えていきたいと思う。

竹本忠雄講師のご講義に引きこまれた

（長崎大学　経　四年　地徳奏汰）

竹本忠雄先生のご講義にはとても引きこまれた。「かくしてぞ人の死ぬとふ藤波のただ一目のみ見し人ゆゑに」という和歌に感動した。たった一目だけ藤の花のような高貴な美しい人を見るために、このように人は死ぬということである。この死生観が美しいと感じた。また日本人の感覚では死ぬのではなく隠れる、日本人にとって死は復活を想定しているとい

カメラ・レポート4

食事は施設の食堂で班毎にまとまって取った。美味しい料理に会話も弾む。

うことにも、命は終わるのでなく、またあらわれる、つながっているのだと感じられよかった。和歌に見られる、別の世界に転移するようなこと、変容を竹本先生は「水鏡する」とおっしゃられていた。この「水鏡する」は新生であったり、目に見えない世界へのつながりだと思った。先生は「あるものがイリュージョンではなくて導きの何かになる、それが水鏡で、人生はそういう導き、示しにみちみちている、死ぬるが生きるになる」とおっしゃっていた。私はこれを信じたいと思った。

長い時間を経ても変わらない心を感じた

（長崎大学　経　四年　藤村　赳）

今回の合宿では、日本の美しさと心を働かせるということについて様々な学びを得た。日本の美しさについては、竹本忠雄先生のご講義の中でご紹介された揺り蚊の和歌や甘南備川の和歌から感じた。三十一文字という限られた文字数の中であんなにも深みのある和歌が詠めるのかと感じた。詠まれた方の心が動いた場面がありのままに和歌に詠まれてあり、それを拝する自分たちも、たとえ時代は違っても、その心の動きを感じ取ることができる。そこに長い時間を経ても変わらない人々の心を感じ、何とも言えぬうれしさと清らかさを感じた。また、「隠れる」という言葉一つとってもそこには魂は滅びず今を生きる人々を見守られているという日本人特有の死生観があり、そうした日本人らしさをあらわした日本語というものに日本の歴史に感じるものと似た先人の思いの積み重なりを感じ、美しいと思った。そして、そうした美しさは今回ご講義頂いた先生方や班に入って頂いた先生方のお言葉によって自分にも感じ取ることができた。

大和心を養なっていきたい

（上智大学　法　三年　髙橋乃亜）

合宿に参加して、心に残った講義は、岸野克巳先生と竹本忠雄先生のご講義である。岸野先生は日本人は古来から「もののあはれ」即ち、「感ずべき時に感ずること」によって、心をはたらかせる「感動」を得たものを「畏きもの」として全てを神だと信じていたと仰った。竹本先生のご講義では「水鏡する」という行為は途絶えてしまったものの、本質にある「大和心」は一万年もの間紡がれて来たと教示された。水鏡の「影見」には、「隠れる」という、いわば「死」を意味する短歌が残っているものの、万葉集とそれを継がれる美智子上皇后陛下の御製では、「死」が「美」として捉えられていた。甘南備川の「影」たる所に「光」を捉え自己の「影」に神を見た短歌や、「那智滝図」の水に、甘南備川の歌が「水鏡」の行為を示唆して「影」に神を見た様に、アンドレ・マルロ氏が「アマテラス」を捉えた話がある。本居宣長の「感ずべき時に感ずる」ことは、水鏡によって自己の影を水面に見て、

そこへ先祖や神々を想う大和心に強く関連するものだろうと思う。お二人の先生方からは、こうして大和心は日本人の「感ずべき時に感ずる」ことによって紡がれ、その内容に水鏡の行為が示した「生」と「死」、「光」と「影」の一元的な世界観によって説明されるのではないかと考えさせられた。自己をかえり見れば、「感ずべき時に感ずる」大和心を素直に表示することができず、まだまだ未熟な短歌創作となっていた。心をはたらかせること、そして「感動」を伴う自己の和歌は、いわば水鏡(自己の中にカンドウを得る)行為のように思う。この気づきから、和歌を通じた自己の内心の収斂を行い、大和心を養なっていきたい。

言葉を大切にしてきた日本人に感動した

(福岡教育大学　教　二年　坪根希世奈)

最も感動したことは、日本人が言葉を大切にしてきたということである。竹本忠雄先生や伊勢雅臣先生のご講義では、天皇陛下や皇后陛下の詠まれた和歌に触れ、天皇家の方にお会いしたことのない私にとっても、歴代の天皇皇后両陛下が私達国民を想ってくださっていることが伝わってきた。また、和歌相互批評においても、普段関わりの少ない班員でも、その人が何を見てどこに感動したのかが言葉や和歌から鮮明に伝わってきた。これらの体験から、日本人は自分の心に生まれた感動を何とか言葉にしようとしてきたのだと感じた。そ

カメラ・レポート5

「『古事記』冒頭を読む－見えない世界の扉を開く－」と題して川越八幡宮権祢宜岸野克巳先生が講義され、「神々の話は生きてゐる。そこには感動があり驚きがあり喜びがあって、恐れもある」と述べられた。

して、そのようにして生まれた言葉はとても温かいものであり、私は日本に生まれて良かったと心から思った。

上皇后陛下の御歌に日本語の美しさを思った

（福岡教育大学　教　二年　畠中優綺）

一番心に残っているのは、先輩方や講義をされる先生のお姿、先人、歴代の天皇陛下や皇后陛下の、心から国のことをおもい、行動されているお姿でした。導入講義で神谷正一先生から、「国のことをわがこととして捉える」ということについてお話いただき、今回の合宿教室で、私も「わがこと」として捉えてゆこうと課題にしました。

特に印象に残ったのは竹本忠雄先生のご講義で、美智子上皇后陛下の御歌にとても感動いたしました。揺り蚊のただ亡くなってゆくことをお詠みになっているのではなく、そこには「舞ふ」とお詠みになったことで喜び、哀しさ、いとしさが含まれてゐるのだとお聞きして、本当にすごいな、日本語は美しいなと思いました。

古典に触れて心が温かくなった

（全日本学生文化会議　津田真木）

古典に久々に触れさせて頂き、心が温かくなりました。竹本忠雄先生のご講義を通して、上皇后陛下の御歌の姿は美しく感じました。「生命あるもののかなしさ早春の光のなかに揺り蚊の舞ふ」。はじめは、「かなしさ」を「悲しい」（Ｓａｄ）の意味だけで捉えていましたが、伊勢雅臣先生と小柳左門先生より「かなしさ」には「愛おしく思う」という意味があると教えていただきました。一日で生命が尽きてしまうユスリカのはかなさだけでなく、早春の光の中に懸命に舞っている姿があることにハッとさせられました。「死」＝「無」という概念ではなく、そこには確かに「光」があることを気付かされ、このような世界観、死生観を持った日本人の感性は美しいと感じ、私もそれを信じて生きていきたいと思いました。

第三班

竹本忠雄先生のお言葉に「真向かいて」いきたい

（（一社）日本港運協会　久米秀俊）

「国防を自分の問題として考へること」について神谷正一さんの講義、特に霞ケ浦での高校生時代のお話、そして涙ぐまれたことに体現されてゐると思った。「我が人生の探求と永久生命への没入」とあへて題した小柳雄平氏の短歌創作の導入講義、その語りぶり、特に寺尾博之さんのことをお話しされた際の涙した様子に感銘を受けた。「大和心のかたちと秘密」と題された竹本忠雄先生のお話には、並々ならぬ思ひで

この御講義を準備され、そして講演をされたことをお偲びした。「水鏡」「愛と憂」「言霊」「大和心」これらの深い思索と御経験を経て語られたであらうお言葉の数々に対し、「真向かいて」いきたいと思った。学生の感想発表を聴いて皆よく一所懸命聴いてゐることに感銘した。

全体感想自由発表を聞きて

次々と壇上に上がり率直なる感想述べゆく若きら頼もし

講義はいづれも充実した内容でした

（元　神奈川県立高校教諭　原川猛雄）

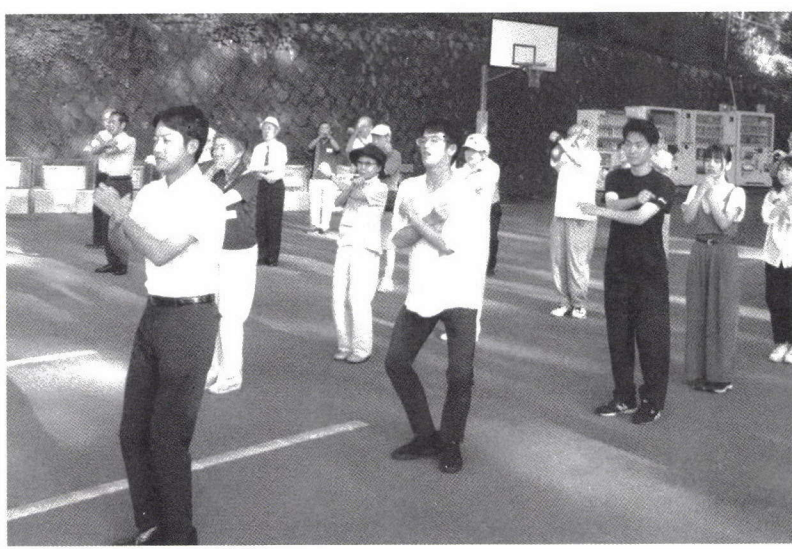
今回は三班に所属し、久しぶりに班行動をとりました。又、四人で寝食を共にしました。同じ部屋で過した三人の方々と交流を深めることができて幸ひでした。各ご講義はいづれも充実した内容で、これからじっくりと振り返へり大事なことを確認したいです。竹本忠雄先生のご講義は一語〳〵かみしめるやうに話されるお姿が印象的であまりに深い内容に驚きました。今後も友らと研鑽を深めていきたいと思ひます。合宿の準備や運営にあたってこられた方々には深く感謝申し上げます。

池松伸典運営委員長の挨拶（閉会式）を聞きて

師の君（竹本忠雄先生）をお招きするためいかばかり心砕きて過させたまふか

運営の委員長としてつつがなく力合はせてつとめたまひし

カメラ・レポート6



朝の集ひ―体操。ラジオ体操の号令に合せて体操を行った。

壇上のみ友の声は高まりて熱き思ひの伝はりてくる

お話しは奥が深いので これから勉強させていただきたい

（日本大学　名誉教授　夜久竹夫）

竹本忠雄先生の御講演が印象に残り、考えさせられた。御講演の中で先生は二十一世紀が文明の変貌期にあることを述べられた。即ち従来のキリスト以外の復活を認めない欧米の生死二分的文明から、全ての存在の転生を認める仏教的な非二分的文明（霊性文明）への転換が起きると述べられたように思う。そのお話しの中で御専門のフランスの著名な学者達との交換を述べられ、引用された書物の中に、同じく存否二分性を超える量子力学に関わる御訳書を示され、興味を持った。デジタル世界で同じく非二分的な量子ビットにも関係がありそうなのである。お話しは奥が深いのでこれから勉強させていただきたいと感じた。

大変有意義で充実した三日間を過ごす事ができました

（(株) 江森造園　小林忠和）

大変有意義で充実した三日間を過ごす事ができました。昨今の憂える風潮の中でも、まだまだ日本は棄てたものじゃないぞーと感じた次第。参加者を見て印象的だったのは、若き学生らの自分の姿勢をしっかり示し、物怖じせず、突然の指名でもハッキリ意見を述べる姿でした。彼らの今後の活躍に期待します。短歌作りは最も苦手であるものの、短時間にも関わらず、何とか四首を提出できました。素直な気持ちで気負いなく臨む姿勢が重要だと知りました。班編成に関してですが、学生、社会人混成にはできないものでしょうか。若い世代とも話したいし、世代間で刺激し合う事にもなると思われますが…。

とても内容の濃い合宿だった

（(有)法隆　長谷川大蔵）

この度の国文研夏季合宿は、私にとって、とても良い機会となりました。以前、二十年程前に、阿蘇の国文研夏季合宿に参加した憶えがあり、福岡中経協の藤新成信会長からお話いただいた時は、是非参加したいと思っておりました。私が参加する事を父も大変喜んでくれ、今回の参加の運びとなりました。また、福岡中経協の勉強会の新しい学びとして、「短歌のすすめ」を通して、短歌の勉強をするような話もあり、今回の勉強は、大変有意義な物となりました。先生方やスタッフの方々の熱心な応対もあり、私も自然と班の男性方達の鍵あずかりとタイムキーパーをする事となりました。学びを通して知り合った先輩方や、再会者の方々、また、新たな若い力のメンバーさん達に触れながら、二泊三日の、とても内

容の濃い合宿だった事を大変うれしく思います。この度は誠に有難とうございました。大感謝、合掌礼拝。

学び合ひ高め合ふ友の大切さ国文研にて心にきざむ

古典や短歌の学問に努めることの大切さ

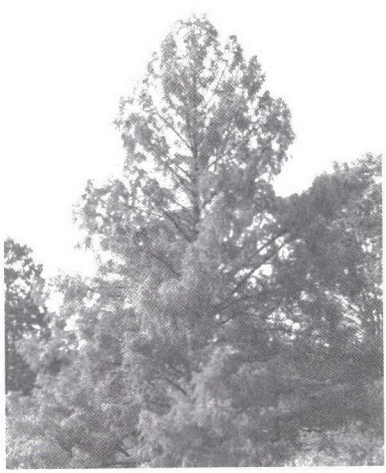
（日章工業（株）　藤新成信）

コロナ後、初めてリアルでの参加となりました。小柳雄平氏の短歌導入、小島尚貴氏の体験発表、と、竹本忠雄先生のご講義を拝聴できたことは、大変有難いことでした。八王子の大学セミナーハウスは、100名程度の（150まで可能？）関東での合宿としては好適の場所と存じます。分断の思想がエスカレートする21世紀にあって、日本の思想大和心が求められてゐること、一人一人が、「水鏡」と称された、善悪、生死を越えた転換点を保持するために、古典や短歌の学問に努めることの大切さを学ばせていただきました。小柳志乃夫理事長、そして池松伸典大兄、内海勝彦大兄ら在京の皆様に感謝申し上げます。亦、今回小島君の体験発表が若い人、新しい学生の心に火を灯すことができるやう、力を尽してまゐりたいと思ひます。

竹本忠雄先生のご講義をお聴きして

愛に対し憂とふことばを残されし師のみ姿を我は忘れじ

カメラ・レポート7



合宿二日目の朝の集ひー御製拝誦。体操の後御製拝誦を行った。目の前に「あけぼのすぎ」が大きく生育してをり、昭和天皇の御製が紹介された（右）。左は「あけぼのすぎ」。

自分なりに考えていきたい

（アサヒ飲料（株）　澤部和道）

小柳雄平さん、小島尚貴さんの同年代の気概に溢れた講義はとても良かった。三十年前に初めて合宿に参加した時の同じ班になったのが小島君で、その小島君が合宿で講義をしているというのは不思議な縁を感じた。竹本忠雄先生のご講義は一時間半の詩を聴いているような心地良さがあったが、内容は難しかった。日本人一人一人がそれぞれの水鏡をもたなければならないと仰ったことに対し、自分の中で考えていかなければならない。伊勢雅臣先生からも「歴代の天皇が目指された国とはどういうものなのか？」という宿題を頂いた。自分なりに考えていきたい。

小島尚貴君の講義を聴いて

仕事と生き方と人生が一体となること君つきつめし

「自分が変われば世界が変わる」

（華泉書道会　坂本和代）

お世話になりありがとうございました。最初から国防の講義で「えぇ…」と思いましたが、霞ケ浦での『心のさけび』を後世の人に託す」に、自分に出来る国防はご英霊に感謝し、知らない子供達に伝えることと思いました。岸野克巳先生の古事記、伊勢雅臣先生の縄文文化・文明で日本に流れる人や物への敬意。わかっていてもつい通り過ぎてしまいます。小島尚貴先生のご著書「コスパ病」は、目から鱗でした。竹本忠雄先生のご講義は、先生の雰囲気に魅了され、広く深い重厚な知識に圧倒されました。淡々と話される上皇后美智子さまの御歌他、上の句と下の句の間の転観点、「水鏡する」の言葉は、わからないままですが、いつでも自分次第で変わることが出来る。「自分が変われば世界が変わる」を、感じることが出来ました。伊勢雅臣先生の「天皇が目指された国はどんな国？」を考えながら後髪引かれながら帰福します。

充実の時間を過ごせし仲間等と御歌に涙し古文に感激す

班別相互批評の楽しさを心から味はへた

（元（公財）郷學研修所・安岡正篤記念館　嶋田元子）

柏（麗澤大学）での宿泊合宿以来、久々の参加となった今回、運営事務局・フリー・班長・班付として準備、お世話下さった皆様に深く感謝申し上げます。短歌創作と相互批評が中心となるこの合宿で、創作そのものと共に班別相互批評の楽しさを心から味はへたのが今回の合宿でした。三日間の生活の中で個々人が感じたもの、その解釈のいかに様々なものがあるか、創作した自分でさへ気付いてなかったことを気付かされた時の驚き。そして何より、他人の作を、その人の心に置き換へて、ふさはしい言葉、言ひ回しを必死に探さうとして下さる班員の人たち。九割の人たちが、多分、お互ひ初対面

であるのにも拘らず、満たされた気持ちで帰路につけるのは、日本人であるといふ事の誇りと、この国の為に自分が成すべきことは、といふ事を常に心に秘めてゐるからではないかと思ひます。

今回の最大の収穫は人との出会いでした

（浜田聖子）

今回竹本忠雄先生の講義があるという事で、ほとんど何も解らない状態で参加しました。先生のお話は、大和心の生のむすぶ、顕れる、隠れる、往きて還る、水鏡する事の意味、自分の中にある水鏡を常に意識して生きる事等、深いお話が多く、後から又、良く考えたいなと思いました。その他にも、古事記を読むきっかけができ、神谷正一先生の防衛の最前線にいられた御苦労、国を守る意味など、小島尚貴先生の、一人一人が消費を考える事が国を強くする事等多くの気づきを得ました。短歌の創作はまったく出来なく、つたない歌を添削していただきありがたかったです。今回の最大の収穫は人との出会いでした。新しい出会いが又、道を広げてくれたと感じました。

二つのことを学んだ

（学校法人　中村学園　宮崎佳弥子）

カメラ・レポート8

短歌創作導入講義。森林パートナーズ（株）取締役社長小柳雄平氏は、老いも若きも、男も女も、学問の有無も、関係なく等しく「短歌」は詠み継がれて来たと説きつつ、先人の歌を引いて「一首一文」、「体験を具体的に詠むこと」等の短歌詠草の原則を懇切に説かれた

学んだことは、大きく二点挙げられます。先ず一点目は「相手を想う心」ということです。神谷正一先生が、特攻隊の学生が送った手紙についてご紹介される際に涙を流され、竹本忠雄先生が紹介された美智子上皇后陛下の御歌には、民を思う気持ちが溢れていました。伊勢雅臣先生はご講義の最後に「歴代天皇が目指されたのはどんな国か、我々も大御宝の一員として何ができるか」と問いかけられましたが、正にその答えが、日本人が常に持ち続けてきた「人を想う心」なのでは、と思います。

二点目は「むすび」と「水鏡」という日本人特有の観念と感謝です。岸野克巳先生は、日本人は古来から「壊すのではなくむすび合わせることによって新しいものを生み出してきた」と仰り、竹本先生は、「水鏡」という観念をお話になるなかで、日本人の死生観について語られ、「往還の考えを持っている」とお教えくださいました。この私の命は断絶することなく、古の人々から受け継いでいるのだと考えると、全ての事象において感謝の気持ちが溢れてきます。

師と友に感謝の思ひ告げしあと大和心を持ちて筑紫へ

（元　さいたま市職員　井原　稔）

今年も充実した研修会に参加させて頂き感謝申し上げます。まず小島尚貴先生の御講義ですが、高校時代の恩師との御縁で国文研の合宿教室に参加され、その際学ばれた国家観・歴史観に基づき社会人になられてから貿易事業等の場で実践を継続されてきたことに対して心から敬意を表したく存じます。

通常輸入や開発輸入であれば問題ないが、自損型輸入の横行は我が国の産業基盤や地域社会を疲弊させ、さらには勤労所得の停滞をもたらす元凶であるとの御指摘は極めて説得力のあるものでした。これを克服するためにはただコスパが良ければと考へるのでなく、国内企業の製品であってもメイド・イン・チャイナのものは購入しない、地産地消を大事にするなど賢い消費活動が肝要であると痛感しました。

次に竹本忠雄先生の御講義は大変高尚で深く広がりのある内容でした。特に先次大戦の激戦地硫黄島での栗林忠道中将の辞世の歌と、その五十年後に詠まれた先帝陛下の返歌はまさしく君臣相和の絶唱とも言ふべきものでありませう。

また、皇后（現上皇后）美智子さまの御歌は詩人としての感性が随所に煌めきを放たれてゐて、これからも歴代天皇の御製と共に繰り返し拝誦していきたいと考へてをります。

懐かしき友と会ひたるうれしさに目に浮かび来る淡路島影

（平成二十六年合宿地）

たたなづく多摩丘陵の青垣を窓より見つつ食事楽しむ

第四班

上皇后美智子さまの御歌を拝誦していきたい

小島尚貴先生の活動に圧倒される思いでした

（山梨大学　名誉教授　前田秀一郎）

小島尚貴先生のわが国の文化、伝統を守りながら経済的繁栄をとりもどすための活動に圧倒される思いでした。安価なものを購入したいという世の風潮に抗するのは大変なことと思いますが、私も微力ながら、先生の活動を少しでも支援したいと思います。竹本忠雄先生は、「私どもは銘々の水かがみをもたなければならない」と仰しゃいました。「銘々が」でなく「銘々の」とは、私ども各々が身の丈に合った自分の水かがみを持つということと拝聴しました。この自分の水かがみをどう磨くかを課題として今後生きたいと思います。

日帰りの参加の吾をもにこやかに迎へ容れます友らうれしも
み友らのあつき情けをかがふりてこの五十年を生き来し我は

竹本忠雄先生のお話に感銘を受けました

（佐藤文昭）

残暑ことの他厳しい中、全国より参集した学生、社会人の熱意に敬意を表します。又、この合宿に向けて入念な準備をされ果敢に実践されたスタッフの方に感謝します。聴講した竹本忠雄先生の講演について述べます。ご高齢にも拘らず、三回目のお話感銘を受けました。たまゆら、美智子上皇妃の御歌によせた転調ゆらぎのお話は、現象の奥に高みを保ち光

会員発表。J-Tech Transfer and Trading 代表 小島尚貴氏は、「遂に掴んだ日本経済復活の糸口」と題して、「自損型輸入」によって一部輸入販売業者のみ巨利を得、それが国全体の利益になってゐないことを指摘され、対策として全体の利得と調和する消費活動を盛り上げることが肝要であると述べられた。

をかげと共に発する生命に感動しました。〝隠れる〟〝顕れる〟の一連の展開も折り重なる生死の綾を感じました。又、ヨーロッパ、キリスト教のありようについて先生のお話から新しい視点を教示され意義深いものでした。

若人の参加が頼もしい

（会社顧問　中村正則）

竹本忠雄先生の御講話は、省略も多く、直ちに了解することの出来ない部分もあったが、博く深い学識に基づく文明観と、上皇后陛下御歌の解釈に圧倒され、及ばずながら励まねばとの感を強く持った。小島尚貴先生の御講話は、経済合理主義（安いものが良い）の歪みをわかりやすく示し、又、対抗する具体策を示し、実践しておられる事に感銘を受けた。九州地区の活動を全国区に拡げていく為の活動が軌道に乗る事を願っている。その為には、「自損輸出型」の弊害を一般にわかりやすく伝える工夫がキモと思われる。ＳＤＧｓの浸透など、現代日本社会にもそれを受け容れる素地は整いつつあるのではないか。松戸、オリセンに続き、三度目の参加だが、若人の参加が続いてゐる事を頼もしく拝見した。事務局の御努力に敬意を表したい。

バスに乗り野猿峠に来てみれば建屋目につく街並の中
炎天をものともせずに学ばむと集ふ若人眉根ぞ涼し

竹本忠雄先生のご講義は、思ひのすべてを伝へようとされてゐるものと感じました

（日立ＧＥニュークリア・エナジー（株）　松井哲也）

日帰りコースで参加させて頂きました。竹本忠雄先生のご講義は、先生の思ひのすべてをこの講義で伝へようとされてゐるものと感じました。お話しされた言葉の数々はとてもすぐに受け止め切れるものではありませんが、これからまた辿らせて頂きたいと思つてゐます。そのお言葉のいくつかを以下記しておきたいと思ひます。

・昭和天皇の辞世の歌とその歌への皇后美智子さまの返歌
・「命の終わりは無ではなく光なのです」
・能における『水鏡する』といふ言葉
・「愛国」と「憂国」の違ひ、プーチンの「愛国」、三島由紀夫の「憂国」
・キリストの教へとその伝道：ペテロの知、ヤコブの行、ヨハネの視
・マルロー：中国と日本の違ひ「愛、花、音」、『人生は何ものにもあたいしない、しかし、人生にあたいするものは何もない。』
・武士道と騎士道の対話年表における霊性による同時性

竹本忠雄先生のご講義
夏合宿の小林秀雄の講演のひよどりの話より語りいださる
武士道と騎士道の歴史に顕はるる奇しき相似を語りゆかるる

みづからの思ひをすべて伝へむと語りゆかるる静かなる言葉で

有意義な時間を過ごすことができました

（株）竹中土木　國分俊喜

社会人として日帰参加でしたが、小島尚貴先生と竹本忠雄先生の御講義は、充実したものでした。小島先生のお話には、日頃考えてもいなかった「自損型輸入」という言葉の意味について新たな気づきがありました。また竹本先生からは、上皇后美智子様の御歌から始まり、最期は「水鏡」「霊性」というお話に至り、「皆さんめいめいの「水鏡」を持たなければならない」というお言葉で締められました。このお言葉を改めて自分ごととして考えてみます。有意義な時間を過ごすことができました。

先人たちが乗り越えてきた困難を学ぶことは、国に対する誇りや愛情を育む

（自営業　小川浩司）

小島尚貴先生が示された、「消費者主導の地産地消」という活動。主義主張を問わず、全ての日本人を味方にできる提唱に大いに賛成する。一人でも活動に参加できることは数多くある。消費者として、商品選びの際に成分表示をチェック

筑波大学名誉教授 竹本忠雄先生は、「大和心のかたちと秘密ー現代文明の変貌に真向かひてー」と題する講義で、現代は断絶の時代である。それをどう超えようかで、文明は変貌の時を迎へてゐる。生死を超えて往還する「大和心」に視線を注ぐべきではなからうか。めいめいの「水鏡」を持たねばならない、と示された。

し、国産品を選ぶことで、国内産業を応援することができる。確かに、全ての商品で国産を選ぶのは容易ではないが、成分表示への注意を持続することで、国、地域を支援する行動が可能となる。

国の歴史、文化、そして伝統を理解することは、国民意識の土台を築く。先人たちがどのような困難を乗り越えてきたのかを学ぶことは、私たちの心に国に対する誇りや愛情を育む。この情が、国を守る強い意志として現れる。幸運にも、我が国には千年以上も前の御製・御歌を初めとした和歌があり、混迷を極める今こそ、多くを学ぶ事ができる。

私たち一人一人の行動が集まることで、国を守る大きな力となることを確信している。

大変多くの学びがありました

（クリーンソース　増田慎一）

本日合宿教室に参加して大変多くの学びがありました。まず小島尚貴先生のご講義の中で、自損型輸入の説明があり、それが通常の輸入とどう違って、どう日本の産業を破壊しているのかがよく理解できました。そこで自分自身の買い物、消費活動を振り返った時、いかに自分が無自覚にその自損型輸入を支持してしまっていたか痛感できました。今回の講義を通して、自分ができること、やるべきことがつかめたので、この反省をいかして、まずは自分自身で国産品の地産地消運動を展開していきたいと思いました。次に竹本忠雄先生のご講義では「信じ難いことを信じてきたのが日本の歴史であり日本の伝統」というお言葉があり、上皇后陛下の御歌や名歌人の和歌を通して古代日本人が持っていた見えない世界を見ようとする心の働きについて学ぶことができ、感銘を覚えました。まだ霊性とかはよく分からないことも多いですが自分自身の水鏡を獲得できるように研さんを積んで参りたいと思います。

緑深き桑の都に日の本の心を学びし友集ひける

学びの多いひとときを過ごすことができた

（元　千葉県小学校教諭　竹内孝彦）

学びの多いひとときを過ごすことができ感謝申し上げます。小島尚貴先生のお話は、コスパ、プチプラと言われて安価なものに飛びついていることを「自損型輸入」として断じられ、目から鱗の落ちる思ひで拝聴いたしました。御著作には目を通してをりましたが、実際に直にお話をうかがふことでさらに理解が深まりました。ダイソー、ニトリ、ワークマン、ユニクロといった利益をあげてゐる会社が実は日本にとって大きな損失であることを広めていかなければなりません。竹本忠雄先生のお話は、「水鏡」といふ大神のみちびきのしるしと見ることで、和歌をはじめとする世界観が大きくかはることを説いてくださりました。「ひむがしの…」の和歌は、大

景を歌ったものだといふ浅い認識でゐましたので、霊的な意味を考へ直してゆきたいと思ひます。「かはづ鳴く…」の「影見えて」は天照大神のみかげと解釈されてゐて、感じ入りました。

若い学生さんと共に学べる機会

（主婦　野々村悦子）

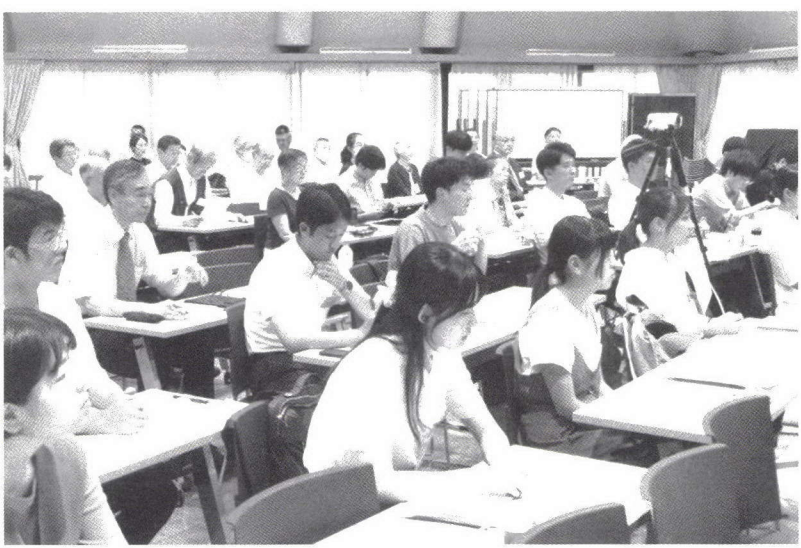
夏の終はりに近づく頃国文研の合宿教室が開催される。学生だった頃より約半世紀近く過ぎてしまってゐるが　若い学生さんと共に学べる機会があることを有難くおもってゐる。毎年の講師に学ぶ数々のことを記憶の薄れないうちに調べてみようとおもってゐる。竹本忠雄先生の「大和心のかたちと秘密」に上皇后様に御歌を学ばせていただいた。御歌からは計り知れない内容のことに驚かされた。浩宮様の二十歳を迎へられた御歌があったことを思ひ出した。

赤玉の緒さへ光りて日嗣なる皇子とし立たす春をことほぐを思ひ出し「加冠の儀」の長歌があったことも思ひ出した。小島尚貴先生の日本経済復活のいぐさ畳のお話は納得した。これから消費者として国産品を賢く買ふやうに心がけたい。

言の葉の言霊宿る御歌にはいと神さぶる光さへ見ゆ

大変感銘を受けました

カメラ・レポート11



講義に真剣に聞き入る参加者。

（ＮＴＴファイナンス（株）　仁村由樹子）

今回、竹本忠雄先生のご講演を拝聴する機会に加え、講演会の後に直接お話をできる貴重な機会も設けて頂き、誠にありがとうございました。

皇后美智子さまの御歌では、大変貴重なお話を交えて、御歌をお詠みになった背景やご心情等を伺い、深く感動いたしました。

御歌には、上の句と下の句の間に影がちらつくものがあり、一つの転回点を示すキーワードが必ず入っている。そこから我々生きているリアリティから目に見えないリアリティへ誘われるお話に深く感じるものがありました。

能の世界では、「水鏡する」（変容する）ことが表わされていて、物語にそのきっかけも描かれていますが、皇后美智子さまの御歌も同じであることや、1974年5月27日 アンドレ・マルローが那智の瀧をみた時、まさに那智の瀧が水鏡であった。あるものの導き（お徴）で、ある人にとっては別の世界に入ることができる。人生はそのようなことに充ち満ちているというお話に大変感銘を受けました。本当にありがとうございました。

フリー班付

全く充実した合宿生活でした

（昭和音楽大学　名誉教授　國武忠彦）

ありがとうございました。私にとっては全く充実した合宿生活でした。運営に当られた本部の方々、また話をしてくださいました講師の先生方には厚く感謝申し上げます。この合宿の感動を忘れずに、明日からは合宿講義を読み返し繰り返し学びご恩に応えたいと思います。とにかく、今回の二泊三日の合宿、寝ても覚めても嬉しく思いながら過ごしました。特に学生さんとの班別研修が学ぶことが多く勉強になりました。学生時代を想い出し、学生さんの心になり、当時指導を受けた先生方のことが想い出され、先生方の心がわかるような気になりました。今は激変の時代、緊迫した世の中となりました。いかに生きるかが日々問われる状勢となっています。若い人たちとこの困難な時代を切りひらき生きていきたいと思います。

最も感動したのは、学生達の真摯な姿勢でした

（学校法人原学園、原看護専門学校　小柳左門）

小規模の合宿ではありましたが、実に内容のある合宿でした。有難うございました。竹本忠雄先生をはじめ講師の先生方の御講義はそれぞれ真剣で、深く感動するものでした。ことに若い国文研会員の取組みは素晴しいものでした。しかし、実は最も感動したのは、学生達の真摯な姿勢でした。皆講義をノートに取り、それをもとに班別討論に参加していました。

ここに大きな希望を感ずることができました。これから大変な時を迎えますが、益々、皆さんとともに歩んで参りたいと思っております。

あふれくる思ひを語る若人に学びてわれも進まんと思ふ

レベルの高い議論に感心しました

（元　皇宮警察本部長　小田村初男）

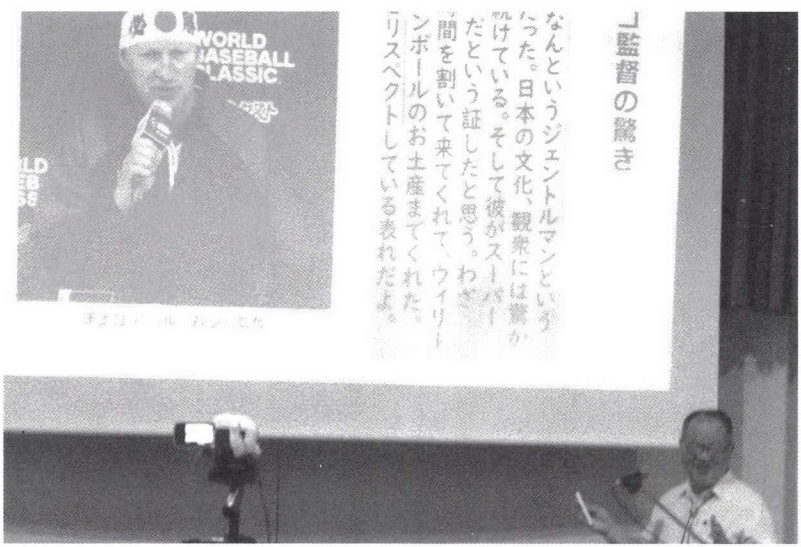
久し振りに本格的な合宿教室に参加する事ができ、清々しい気持ちで最終日を迎へました。講師の先生方並びに事務局の方々に感謝申し上げます。また、第二班（学生班）のフリー班付として、班別研修、短歌相互批評に臨みましたが、今回参加の学生達は、特に良く勉強してをり、レベルの高い議論がなされてをり感心しました。分からない難しい事も継続して考へ続ければ、いつか分る時も来るとの言葉を支へとして、今後も学んでいきたいと思ひます。

過去は私たちが愛し、信じる限り、
いつも現在の中に確たる実感を伴って実存する

（J-Tech Transfer and Trading　小島尚貴）

再び国文研とつながった喜びに満たされた二十七年ぶりの夏合宿でした。竹本忠雄先生のご講義で印象に残ったのは「西洋はｂｅｉｎｇですが、日本は出てくる、結ぶ、現れる、と

カメラ・レポート12



「大御宝を鎮むべし―歴代天皇の祈り―」と題して筑波大学非常勤講師 伊勢雅臣先生は、「国家国民の安泰と幸ひ」を祈られる御心は、今上陛下まで一貫して仰がれるところである、と指摘された。

考えます」というお言葉で、日本では私たちの心持次第で、ないものもあり、あるものもなくなるのだと感じさせられました。実存、つまり「あること」は、「ないこと」と切り離し、対立させた上で理論や科学によって証明するというより、私たちが「信じがたいことを信じる」という、モノや歴史の命、霊性に積極的に働きかける心になった時に、初めて可能ならしめられるのだと理解した時、大和心の貴さ、もののあはれの本質がつながりました。私は国文研を通じて歴史、古典、同胞、日本とむすばれました。過去は私たちが愛し、信じる限り、いつも現在の中に確たる実感を伴って実存することを、私は学生時代の夏合宿で学びました。その学びが私に得せしめた処が貿易と地方経済の分野でした。私は買い物と国際取引において失われた大和心を再び顕現させ、結ばせるために孤独な戦いを挑んだことを振り返った時、竹本先生のお言葉、国文研の学び、私の仕事が一直線につながりました。この確信の導くところに従って行動し、来年も参加します。

友が師がわれにかけたることのはにあふるるまごころしかとこたへむ

感動で先人とつながる学問を

これからも追い求めていきたい

（全日本学生文化会議　坂本匡史）

大変感動の多い合宿教室でした。講師の先生方が心を働かせてお話をされるので、聞いている側も心が動くのだと思います。そして如何に日本文化とは深く素晴らしいものなのかと、スケールの大きさを感じさせていただきました。私は今まで簡単に日本文化を「わかった」と言って浅薄な自分の体験の範疇に押し込めてきたのです。

特に、竹本忠雄先生のご講義は文化の深淵を垣間見たように思い、戦慄のような感情を持って受け止めました。「水鏡」を通じて、「隠れたもの」と交流してきたのが日本文化の力なのだと気づきました。今まで数十年前、数百年前の会ったことも無い先人、会ったことのない英霊の言葉や古典にふれると何故感動するのかと今まで不思議に思っていました。竹本先生のお話を伺い、先人は肉体的に滅びたとしてもいなくなったわけではなく「隠れている」だけであり、交流できるのだと思うと感動が込み上げてきました。会ったことも無い先人と、古典を通じて会うことができ、そして感動を共有できる日本文化に対して感謝の念が湧き上がってきました。

岸野克巳先生の本居宣長の古事記伝のご講義でも、見たことがない神々の世界をまるで見たように記されている本居宣長、そして岸野先生のお話ぶりが印象的でした。別天津神がパァッと一斉に誕生する様子が目の前に広がるようで、先人と心が一体化するまで心を寄せ続ける学問が、現在まで神話・古典をつなげてきたのかと思うと感動しました。

現在、インターネットが発展して意思疎通が簡単になったにもかかわらず、人の心は「分断」の苦しみにさらされていると思います。国際的な対立は激化しており、さらに私は大学生と研修する機会が多いため、自分の殻に閉じこもりがちな課題を感じています。ＳＮＳによって気の合う人間だけと交流することが可能になったため、話が合わない人間とは話そうとしない学生が増えています。またコロナ禍によってその傾向は激化しています。これは相手を簡単に「わかる」と思う勘違いから発生しているのではないかと思います。わからないからこそ対象を見つめ続ける学問こそが、国民文化研究会の学問であり、そこに「分断」はありません。

「わかる」学問ではなく、感動で先人とつながる学問をこれからも追い求めていきたいと思います。此の度は誠にありがとうございました。

本部・事務局・フリー

大変な衝撃を受けた

（若築建設（株）　池松伸典）

御講義すべてについて内容のある深いお話を聞くことができた。岸野克巳先生の御講義で紹介された「古事記初発の段」を社会人班（全日程）に参加させていただき読み味はった。

カメラ・レポート13

創作短歌全体批評。元　（株）ＩＨＩ　内海勝彦氏は、この後の班別相互批評の時間では、相手の身になって、何を言ひたいのか、どうしてこの表現になってゐるのかをよく理解し合ひながら、より適切な表現となるやうに取り組んでほしい、と述べられた。

「國稚く浮脂の如く、くらげなすただよへる時」という言葉が心に残った。古代人が文字がなかった時代に中国から伝はってきた外来語「漢字」を使って書き表したことを先生が説明されたが、古代人が国が生まれる様をどのやうに感じたのだらうかと考へる時、古代人の感性の鋭さが思はれてきた。

また竹本忠雄先生の心のこもった御講演には大変な衝撃を受けた。先生にご講演をお願ひしてから、どれだけのことを考へてこられたのか、世間に多くの集まりがある中でも一つの小さな集まりにすぎなくなってゐる本会の研修において、先生が御高齢であられながら、渾身の力を注がれて話されたことは心に深く刻まれた。

私にとって理解には程遠いものがあるが、霊性文明の姿をかすかに垣間見させていただいたやうに思ふ。今後の人生において一日一日を大切にして、後進の我々に伝へられようとされた先生の思ひに少しでも近づいていき、若い方々と共に学びを深めることによって美しい日本の姿を引き継いでいきたいと思ふ。

いかならむ学びになるかと案ぜしも皆のおかげにこころ晴れにき

樹々囲むこの学び舎に友皆と過ごせし日々を忘れざらなむ

皆と日本の将来について

考へて行きたいと強く思った

（埼玉県北本市　最知浩二）

昨年同様八王子大学セミナーでの開催だったが、二回目といふ事もあり、また施設の方が昨年同様とても協力的で、少ない運営スタッフながらも何とか合宿を乗り切れたと思ってゐる。

合宿中、写真撮影、録音、講義録画とフルに担当したので、集中してあまり講義を聞くことが出来なかったが、二日目の小島尚貴さんの講義はとても刺激を受けながら拝聴した。

これまで『コスパ病』の著書やYouTube動画を通して、氏の取り組みや、この三十年間の日本人の消費行動、日本経済の弊害について鋭く論破している内容にはとても感銘を受けたが、実際目の前で熱くその事を話される小島さんの講義はより圧巻だった。ただ問題点だけを列記し、机上の理論を上から目線で話す学者や経済ジャーナリストは多くゐるが、実際農家や漁師さんを自ら足しげく訪ね、一緒になって今の日本の農業や漁業の問題を解決していかうとされる氏の取り組みには頭が下がる思ひだ。

また学生との取り組みも各地で動き出し、多くの経営者も賛同し始めたとのお話を伺ひ、自分でも何か協力出来ないものかと考へさせられた。これまでの合宿では、このやうな実態経済の講義や講話は少なかったと思ふが、日常の身の回りの経済問題を具体的な事例を挙げて問題提起される今回のやうな内容は学生にとってもとても興味深いものだったと思ふ。是非今後もこのやうな講義を通して皆と日本の将来について

全体感想自由発表。参加者は次々と登壇し、思ひのたけを披歴していった。

考へて行きたいと強く思った。

小島尚貴さんの講義を聞きて

わが国のいぐさや畳のすぐれたる技今一度広めたしとふ
足しげく農家を訪ね己が思ひ伝へむとせし姿浮かび来
吾もまた熱き思ひに応へたし大人の語るる言の葉聞けば。

世界情勢の中で、我々は、また日本はどうあるべきか

（元㈱ＩＨＩ　内海勝彦）

今合宿は、先の見えないロシアによるウクライナ侵略やますます強まる中国、北朝鮮の脅威といった世界情勢の中で、我々は、また日本はどうあるべきかに思ひをはせるものとなった。

神谷正一さんが「わがこととして考へる―国の護りを身近に―」のご講義で、航空自衛隊生徒時代に霞ケ浦駐屯地の資料館で、特攻志願の予科練生の遺書を目にした時の経験を涙ながらに語られ、この体験がその後の自衛官人生の根底になったとのお話に感銘を受けた。また旅券の話は、身近な事柄から個人と国家の不可分な関係についての示唆に富むご教示であった。

竹本忠雄先生のご講義は多岐に亘り、かつ、深遠なる思想のお話ばかりなので。これからも繰り返しかみしめたいと思ふ。最後にマルローの言葉を紹介されて「私どもはこの『しかし』と言はせるものを、則ち銘銘の水鏡を持たなければならない」と言はれたことが心に刻まれた。先生から「今一度、古来より受け継がれてきた本来の大和心を銘銘の生き方に甦らせる、その徴を掴みなさい」と叱咤されてゐるやうに思へた。

竹本忠雄先生御講義を拝聴して

穏やかに御心込めて話さるる大人のみ声の胸に響きぬ
畏くも皇后宮の御歌読み高みにゆくと師はのたまへり
銘銘の水鏡もてと宣りたまふ大人のみ言葉謹みて聴く

合宿教室をやってよかった

（国民文化研究会事務局　飯島隆史）

いつも思ふことですが、全体感想自由発表を聞いて、やはり合宿教室をやってよかったなあと思ふことです。学生の皆さんは良くご講義を聞いて、よくメモを取られしっかりと理解されてゐると思ひます。一人一人の感動がよく聞く者へ正確に伝はって参ります。二泊三日といふ長い時間、緊張がよく続くものだと感心させられます。この感動が末永く続いてゆくことと、この時の諸々の「問い」がいつまでも心に残ってゆくことを祈念して感想とします。

感動を若き友等とともにする時こそ真の喜びぞ湧く
二泊三日の合宿は初めての試みでした

（国民文化研究会　磯貝保博）

理事長を中心に「合宿教室」開催に向けて取り組まれてきた運営委員の皆様に心から御礼申し上げます。一日だけの参加者を含め二泊三日の合宿は初めての試みでしたが、全体として八十名もの参加者となったのは来年の合宿につながることでせう。又ご講義の内容はいづれも参加者の胸に残るものを与へてくれたと思ひます。ところで、今回小生はフリーといふ立場で合宿にかかはったのですが、次回からはフリーといへども（会員同士でも）班構成にして勉強したらどうかと感じました。ご検討をお願ひ致します。

次々に思ひのたけを壇上に登りて述ぶる若き人らは

根源的な課題に取り組む、合宿教室の〝意義〟

（元　日産自動車（株）　古川　修）

この三日間を振り返ってゐると、何か、不思議な思ひが迫ってくる。神谷正一氏の特攻の遺書に触れた若き日の思ひ出から導入講義がスタートし、その夜の岸野克巳氏の講義では、小泉八雲・小林秀雄・岡潔の『見えない世界の扉を開く』貴重な言葉に、心うたれました。そして、その思ひが続く中、竹本忠雄先生の『大和心のかたちと秘密』と題する御講義を美智子さまの御歌をはじめ、古歌に秘められた「秘密」を、お聞きする機会を得たことは、ありがたいことでした。正に、「変貌する現代文明」に真向かひて、今、求められてゐるも

カメラ・レポート15

閉会式。池松伸典副理事長は、まもなく皆さんそれぞれの日常に戻られるが、そこでの取り組みを定期的に続けることが大事で、日々の生活の中で考へ続けることで、単なる知識ではない身についた学問になるはずだ。ご参加を機縁に、交流を密にして勉学を深めていきたい、と述べられた。

のは何か、といふ根源的な課題に取り組む、合宿教室の〝意義〟を改めて感じ、この合宿の開催と運営に尽力された諸兄姉に、心より感謝申し上げます！

若き日のくさぐさの思ひよみがへり若き友らの美しく見ゆ

わがこととして考へる…国の護りを身近に

（元 三菱重工業（株）　島津正敷）

わがこととして考へる…国の護りを身近に。私の場合は、高校時代、社会人時代の体験。防衛庁さんからのお誘ひで、私はP３Cに乗せて貰ったことがある。厚木基地から飛びたって海上を沖縄沖まで飛行した。貴重な体験であった。このやうな貴重な体験を私だけの財産とするのはもったいない。できるだけ多くの方にも経験して貰ひたい。そして日本国の護りを国民の一人として共有することは如何であらうか。

若き頃P３Cに案内され海の護りの大事さを強く認むる

実に中身の濃い学問ができた

（筑波大学非常勤講師　伊勢雅臣）

今回は二日目夜の講義を担当させていただいたが、それ以外には2班に加はって班別討議等に参加させていただいた。

いづれのメンバーも、非常に熱心に討議に加はり、実に中身の濃い学問ができたと思ふ。学生、若手社会人の参加者に感謝するとともに、かういふ日本人を一人でも増やしていく事が、私の任務でもあると考へてゐます。

全体感想自由発表

次々に前に出でてはにこやかに思ひのたけを語りたまへり

合宿で学びしことを心こめ語りゆく様をうれしくも聞く

合宿中に創作された〝短歌詠草〟

―しきしまのみち―

短歌創作について

この合宿教室では、これまで主催者を含めて学生青年諸君全員が短歌を作って参りました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなってをります。従って、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとって、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿生活の中で自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠った言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行った様に思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分・職業の人々が、学問知識の深浅、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直に歌ひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に短歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば短歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、短歌を詠むことを人生の修行の一つの手段と考へて「しきしまの道」とよんできました。日本人は、短歌を詠み交はすことによって、人間にとって最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合ってきたのです。先祖の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に先祖の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく先祖とのつながりをもった日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。

現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとって最も根源的な心の問題がなほざりにされてゐます。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一歩でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の批評によって集中的になされてゆきます。心の奥底に眠ってゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして豊かな人間性を取り戻さうとする試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者にとって、忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿二日目朝、国民文化研究会会員の小柳雄平氏（森林パートナーズ（株））により短歌創作導入講義がなされ、短歌を作る上

での基本的ルールが指導されました。その後、創作短歌が紙及び電子メールにて提出され、歌稿に編集されました。提出された短歌は、合宿三日目朝、国民文化研究会会員の内海勝彦氏（元（株）ＩＨＩ）によって短歌全体批評がなされました。心の籠る講評の中で作者の一語一語に含まれる心を偲ばれ、直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得し、その後の班別短歌相互批評に生かされていったのでした。

ここに収録された短歌の数々は、「短歌全体批評」及び「班別相互批評」にて推敲・添削されたものです。これらの短歌の中から瑞々しい貴重な魂の輝きをお読み取りいただければと、心から祈念する次第です。

短歌詠草（しきしまのみち）

合宿第一回目の創作作品（班別相互批評をして添削された作品です。尚、第二回目の作品は感想文の末尾に収録。）

第一班

東洋紡㈱　庭本秀一郎

昭和天皇御製を思ひ起こしことを
彼方にて風に揺れゐる木を指して曙杉と教
へられけり
見初めたる曙杉はかくまでに大ぶりの木か
驚きて見る
育ちゆく曙杉に立ちなほる国の姿を重ねら
れしか
あたたかき大御心のしのばれてしばし眺め
ぬ曙杉を
（昭和天皇御製　昭和六十二年）
わが国の立ちなほり来し年々にあけぼのす
ぎの木はのびにけり

作曲家　武澤陽介

親しき友からのメールが届きて
朝夕に我を忘れて待ちわびし君の便りの嬉
しきかな

熱帯夜

寝苦しき夏夜を堪へし明け方の窓辺の風の
心地良きかな

関西外国語大学　四年　蜂谷　翔

自衛官になることを決意して
先人の受け継ぎ来るこの国を我も護らん防
人となりて

福岡大学　経　三年　阿部遥人

富士見ゆる　ちょうかけ声に　心はやり
足をはやめて　高み目指しぬ
細き道を　せいてのぼれど　蜘蛛糸の　顔
にかかりて　歩みとまりぬ
高台で　見えずあきらめ　時たちて　よう
やく見える　富士のいただき

中村学園大学　流通　一年　本間史久馬

富士山頂朝日の光を浴び満ちて返す光の美
しきかな

長崎大学　教　四年　安永彩夏

食堂前の花を見し折
まっすぐに夏の光をうけながらオレンジの
花の鮮やかに咲く
そよ風に揺られながらも夏の日の日ざしに
負けず凛とたたずむ

京都女子大学　文　三年　板西清香

解見えぬ問題深く考へて悩むことより学び
始まる

University of Stirling UK　一年　永安愛海

木漏れ日の中を歩みて父母と共にすごしし
幼き日思ふ

戸田建設㈱　青山直幸

八王子セミナーハウスに到着して
照りつくる日射しの中を登りゆく集ふらむ
友らの面浮かべつつ
みどりなす木々生ひ茂る岡の辺にひときは
しるくさるすべり咲く
久々に会ひし友らのなつかしき笑顔を見れ
ば力湧き来も
お互ひの体気づかひつつがなく過ごせしこ
とを共に喜ぶ

神谷正一先生の合宿導入講義を聞きて
若き日に同じ班にて学び合ひし友の講義に
心踊りぬ
真直なる心を持ちて誠実に職務に励みし姿
浮かびぬ

特攻に身を捧げたる学徒らの文読みませり
涙ながらに
あまたたびわが領空を犯されし危機に立ち
向ふ気迫伝はる
国の護りわがこととして考へよと君は厳し
く諭したまひぬ

元　関西熱化学㈱　天本和馬

散策

幹太く枝広げたる大欅思ふがままに伸び育
ちゆく
木々はみな枝打ちもなく各々に光求めて枝
葉競ひぬ
欅下小路下りて降り行けばイチョウの木々
見ゆ谷の近くに
薄緑の銀杏たわわに実りをり枝はたわみて
腰曲げんとす
谷下は思ひのほかに広がりて光映えたるグ
ランドのあり

竹本忠雄先生の御講義を聞きて

おのもおのも水鏡持ててふご指摘は重き言
葉ぞ胸に迫りく
おのがじし心を映すか水鏡くもり無き影求
めゆかねば

全日本学生文化会議　清川信彦

班長の庭本秀一郎さんの進行により
班別研修を行ひて
やはらかな声で友らに感想を求めゆかれり
我が班の長は
素直なる感想求むる長によりまことことば
の引き出されゆく
友からの投げかけしかと受け止めて答ふる
対話広がりにけり
お互ひの心はしだいに通ひ合ひ皆の顔(かんばせ)
ほころびにけり

道端に植ゑられし一本の松を眺めて
まっすぐに天に向かひて堂々と立ちたる松
のごとく生きたし

第二班

日本大学　法　四年　清水陽平

散策の折

去りてゆく夏を惜しみて鳴く蟬の声を聞き
つつ坂道を行く
長月となりて焦りぬ夏までに果たす務めを
多く残して

長崎大学　経　四年　地徳奏汰

見上ぐれば木の葉の緑夏の陽に色あざやか
に透き通り見ゆ

長崎大学　経　四年　藤村　赳

静かなる夏のそよ風流れをり木の葉のゆる
る心地良い朝

上智大学　法　三年　髙橋乃亜

木の間より見ゆる青山ながむればふるさと
恋し出羽の三山

福岡教育大学　教　二年　坪根希世奈

福岡の友らと離れ不安もち同期と二人で訪
れし東京
折々に台湾の友いかにして過ごしをるやと
思ひ馳せたり
福岡で次集ふときおのおのの学び得しこと
語り合ひたし
苦も楽も共に過ごせる友なれば離れをれど
も心は通ふ
ゆくすゑはおのおのの道進むとも尊き友を
思ひて励まむ

福岡教育大学　教　二年　畠中優綺

蝉の声空一面に広がりて精一杯にいのちを
生きる
一輪の黄色の花は太陽の光に向かひ生き生
きと咲く

全日本学生文化会議　津田真木

名前の由来を思ひ出して

真直ぐなる木のごと素直に生かなむと御祖
にかけらるる願ひを知りたり
故郷ゆ離れたりしも御祖らの願ひの限り強
く生きなむ
御祖らの願ひによりて生かさるる幸を感じ
て今ここにあり

合宿研修を受けて

何気なく使ひし言葉に古ゆ守り継がれし
精神知りたり
「むすび」より新しきものの生み出され今
ここにあると感じて嬉し
日の本の古辿りて本来の我を見つけに学び
深めむ

第三班

（一社）日本港運協会　久米秀俊

朝、皆と散策をせし折り（九月二日）

富士山のいただき見ゆとの歓声に心はづみ
てその場に急ぎぬ
緑濃き樹々のあひだゆ富士山の稜線遠くに
眺め得しかも
園内を歩み回れど富士見ゆる場所探し得ず
あきらめをりしに
樹々の間の遠くにかすみし空を背にか青き
影のくっきりと見ゆ
朝陽浴び緑照り映ゆる樹々の中に百日紅の
花の紅しるけき

元　神奈川県立高校教諭　原川猛雄

班別輪読（古事記）にて

みなともに声を合はせてみ文読むこのひ
とときのありがたきかな

散策にて

木の間より富士山見えてともどもと喜び語
らふ朝のひとときこ

日本大学名誉教授　夜久竹夫

朝の集ひ

八王子の里の直近の山中に朝日に光る夏
のみどりの

班別研修

山中で学びて感ず言霊の友の心を動かす力
を

㈱江森造園　小林忠和

晩夏の候やまと心をはぐくみぬセミナーハ
ウスに集ふ仲間と
散歩道セミナーハウスの一隅に富士を望み
てメタセコイア立つ
何げなく見上げし空に美し月思はず呟く
アイラブユーと
焦りつつ十八時半迫り来てなほも浮かばぬ
第一首かな

（有）法隆　長谷川大蔵

ひさびさに國思ふ仲間と学びあひ世のさざ
れ石になりたく思ふ

日章工業（株）　藤新成信

和歌よむは「心の修練」とのたまひしみ友
の言葉の胸に迫り来

アサヒ飲料㈱　澤部和道

お父さんの容態はどうと尋ねこし先輩の多
くてありがたしと思ふ

華泉書道会　坂本和代

朝の集ひ

西の空月眺めつつ散歩せば野猿峠に秋風の
吹く

竹本忠雄先生のご講義を拝聴して

たんたんと語られる師の言の葉を聞き漏ら
すまじと静まれる講堂

元（公財）郷學研修所・安岡正篤記念館　嶋田元子

富士山の雄姿求めて藪の中上り下りを繰
り返し行く
青き富士はその前にある山の青空の青さを
しのぎて見ゆる

百日紅季節選びてすくと立つその存在を語るが如く

浜田聖子

朝の散策の折

のこり月淡く消えゆく朝空に富士の山影はるかに望む

あゆみつつ携帯みればフランスの親しき友よりメールの届く

学校法人中村学園　宮﨑佳弥子

合宿一日目の夜

師の涙命の「むすび」気付かされ郷に帰りて手をあわせばや

朝の集ひにて

皆人と御製拝誦行ひて気持ち新たに学ばんと思ふ

フリー班付

昭和音楽大学名誉教授　國武忠彦

朝早く多摩の山道語らひて皆と歩けば富士の嶺見ゆ

学校法人原学園、原看護専門学校　小柳左門

合宿地にて

久々に旧き友らと顔合はせ語りて和む宵は楽しき

学び終へあゆむ夜道にさし出づるまろき月影友と眺むる

ひたすらにおのが思ひをたしかむるごととつとつと語る友かな

昇りゆく朝日とともに鳴きいづる高樹（たかき）の鳥の声ぞたのしき

美（かた）しき絵画見せつつ歌を詠む心求めて吾子語りゆく

竹本忠雄先生の御講義

おだやかに語りたまへる御言葉に深き思ひのこもりてありき

たまゆらの命かなしみ詠みたまふ御歌の心語る師の君

ひとことをかみしむるごと心こめ生くべき道を示したまひき

元　皇宮警察本部長　小田村初男

合宿教室にて講義後

スーパームーン数日後の月を見て

合宿の　講義受け終へ　出で見れば　大き月しも　登り来る見ゆ

朝の集ひ後散策にて富士の嶺を仰ぐ

富士の嶺の　今朝も見ゆと聞き　何処ゆと皆と巡りて　遂に見えたり

富士の嶺を　林間遠く　望み見て　気高き姿　尊しと見ゆ

J-Tech Transfer and Trading　小島尚貴

若き日に師のみちびきにしたがひて学びし日々のなつかしきかな

みそとせをへても変はらぬまなびやにふたたび立てしけふのよろこび

みそとせの歩みをともに語らへば道はちがへどこころはひとつ

まがごととたたかふわれの背を押すはつどひし友と八百万のかみ

買ひものでこころをむすびふるさとを取りもどさんと我いどむなり

全日本学生文化会議　坂本匡史

岸野克巳先生のご講義を伺ひて

苔の生す様見て霊異（くしい）と思はるる古人（むかし）の姿尊し

ご講義の終はりて夜空を見上ぐれば美し望月明明と見ゆ

歌にせむ歌にせむとてせはしなく歩きまはれど歌は遠ざく

本部・事務局・フリー

若築建設（株）　池松伸典

竹本忠雄先生の御講義を拝聴して

師の君の語りゆかるる御言葉にみこころこもりて引き込まれゆく
つたなかる我にしあればなかなかに理解できぬまま御姿みつむる
語られしさはなる御言葉振り返りたどりゆかなと思はれにけり

元　（株）アルバック　北濱　道

神谷正一　先生の御講義

御自身と齢の近き若きらの御遺書に涙留めかねつと（特攻志願の霞ケ浦予科練航空隊）
切々と御声詰まらせ語らるる御心胸に強く迫り来
自らを顧みずして出でませる若きらの御思ひいかばかりかは

（株）アイセルネットワークス　最知浩一

朝のつどひの散策の折に
西空にかすみて見ゆる富士の嶺をはるか遠くに友らと眺むる

国民文化研究会事務局長　内海勝彦

合宿二日目の朝

波うちて空にたなびく浮雲の朝日を受けて赤く輝く
ピーヨピヨと愛らしきさへづり聞こえきて新しき日の始まり告ぐる
待ちわびし竹本先生ご講義のその日来たりと身の引き締まる

国民文化研究会理事長　小柳志乃夫

神谷正一氏合宿導入講義に

特攻の遺書読みし日の思ひ出をかたらむとしてお声とだえき
さはやかにつね語りますわが友の言葉とだえきあふるる思ひに

国民文化研究会顧問・前理事長　今林賢郁

合宿二日目の朝

朝日影はやも射しきてけふもまたきびしき残暑のひと日となるらむ
コロナ禍はいやます兆あるといふ御身愛しみ過ごさせ給へや

元　（株）講談社　磯貝保博

猛暑続きて

広ごれる青空すでに秋めくも日の照り厳し今朝も変はらじ

合宿地へ向かふ

バス停に降りたち見れば見覚えの坂道見えて宿舎を目指す
窓外の富士山を見て
箱根山連なる中に富士の嶺は小さく見ゆれど雄々しきなりや

元　拓殖大学日本文化研究所客員教授　山内健生

朝の集ひの終りて（九月一日）

友の指す彼方に富士のほの見えて友とともども我は声あぐ
ほの見ゆる富士山なれども我もまたうれしくなりて指さし声あぐ
富士山の見ゆるに声あぐ我もまた日の本の民のひとりなりけり

元　日産自動車（株）　古川　修

神谷正一氏の講義を聞きて

国護る志を定めし若き日のあふるる情に声つまりゆく
くさぐさの試錬に耐へて歩み来し国の守りの憂ひは深し

小島尚貴氏の『日本経済復活の糸口』を聞きて

高校の恩師の縁を語りゆく若き益荒男輝きて見ゆ
自損型輸入を排し「地産地消」のみ旗かかげし友ぞ頼もし
日の本の全ての人がよろこびて味方にせむと篤く語りぬ

元　神奈川県　小学校校長　岩越豊雄

皆ともに散策すればあざやかなキバナコス

モス道の辺に咲く
日をあびて天にのびたるあけぼの杉のむかうに富士の山も立ちたり
木のもとにもも色美しボケの花さるすべりの花色どりて咲く
花の名を友に聞きたればボケの花と私をさして教へくれたり

公益財団法人・合気会　神谷正一

合宿導入講義に臨みて

語りたきは数多ありしも伝ふべき思ひを整へ講義に立ちぬ
穏やかに若き覚えを伝へむと努めたりしも抑へ得ざりぬ
生業の道は違へど国の護りは他人事ならずと伝へむと思ふ
拙かるわれの講義に若きらのアイコンタクトの数多ありしも

筑波大学非常勤講師　伊勢雅臣

班別研修で若き友らの言葉に

英霊の言葉に心打たれしも自らなすべき事は見えずと
英霊に吾も続かむと思へどもなすべき事の見えず苦しむ
その思ひ抱き続けよ世の中に己の一隅見つける日まで

合宿地に寄せられたお歌

福岡市　山口秀範

五十年余経れどかつての合宿の一コマ一コマ常甦る
時移り学生気質変はれども一人出で来よ道継ぐ友の
年々の集ひ営む友皆のいたつき思ひ盛会祈る

熊本市　今村武人

百日紅赤く色づきこの年の合宿教室巡り来たりき
なつかしき友らの御顔浮かべつつ合宿日程ネットを眺む

由利本荘市　須田清文

父母をしたふ話ゆ国思ふこころ語られし長内先生
語られる言の葉しぐさになつかしき思ひ湧きくる師の君なりけり
事しげきさなかにありていかばかりちぢに心をくだきたるらむ
息すひて信ずることを思ひ切り吐き出したまへますらをの友

地方会場走り書き〝感想文〟

「仮名遣ひ」は原文のままで掲載してあります。

関西会場

久々に充実した1日を過ごせました

（中村昇司）

久々に充実した1日を過ごせました、ありがとうございました。

日本人としての誇りを感じました

（㈱）船井総合研究所　松下和彦）

和歌が、なぜ現代まで受け継がれてきたのか、そのような意味については全く考えることもなかったのですが、竹本忠雄先生のお話で、その一端を感じることができました。辞世の句や何十年後に返す歌など、まさに日本独特の感性やかたちがあるように思います。和歌が未来永劫受け継がれていけば、これからも大和心が喪失することなく継承されていくだろうとさえ感じます。

美智子さまの御歌「君とゆく道の果たての遠白く　夕暮れてなほ光あるらし」の解釈において、日が沈んでもほのかな光があるとの意味は、もしかすると、「この世」が終わっても「あの世」があることを示唆し、永遠に「君とゆく道」があることをうたわれているのかなと、想像します。ストレートではなく、心情が染み出る表現に、何とも言えない味わいとロマンを感じます。たとえ解釈が違っていたとしても、その歌に込められた思いはどうだったのであろうかと、心情を慮ろうとする空想にワクワクする気持ちを覚えます。

伊勢雅臣先生の講座で一番心に残ったのは、「古代人は、すべては神の分け御霊と考えていた」という自然観、人生観です。だからこそ、人への敬意があり、物への敬意があり、すべてを大切にする。この根っこがあるからこそ、立派な国家理念を立てることができ、その根っこを信じるからこそ、教育理念を描くことができるのだと、日本人としての誇りを感じました。

何十年もの昔話ですが、大学での化学の実験中、友人が割れたビーカーをゴミ箱に捨てようと、乱暴にガチャンと放り込んだことがありました。それを見た教授が、「割れたガラス器具であっても決して乱暴に扱ってはいけない。私が尊敬する化学者たちは、壊れたガラス器具であってもみんな大事に扱っていたよ。」と言われたことを今でも鮮明に覚えています。一流のスポーツ選手は道具を大事にするといいますが、それに通ずると思います。やはり、今に気持ちを込め、何事も丁寧にすることが、上達のコツであり、日本人の長所ではないかと思います。コスパ、タイパと効率性重視が叫ばれていますが、無駄な時間や非効率な時間の使い方にこそ、日本人の

本当の価値を見い出し、豊かさを生み出す鍵があるのではないかと感じます。

わが魂　今とアモトを往ききして　とけあふほどに素に直る

大変勉強になりました

（三宅電気（株）加井晴子）

大変勉強になりました。

また、音源まで頂きありがとうございます。繰り返し聞かせて頂きます。

かんなづき
やまとこころを
ききしあと
みれば神みゆ
いばらぎのみや

日本には日本の考え方、西洋には西洋の考え方がある、

（京都女子大学　文　三年　板西清香）

竹本忠雄先生のご講義と伊勢雅臣先生のご講義を聞き、やはり日本には日本の考え方、西洋には西洋の考え方があるということがよくわかりました。どちらが優れている、劣っているということではなく、自分たちに合った考え方でそれぞれ考えて行動していけば良いのではないかと思いました。

水鏡　容易く分からぬ　奥深さ　日本の先祖に　思ひを馳せる

日本人であることに誇りをもって日々大切に過ごしたい

（農作業　中村佳代）

縄文文明は人、物などすべてを敬う時代であることを知り正に現代人が必要とする學びであると思いました。貝塚は食べ物のごみ捨て場と習いましたが実はお墓であり縄文人が感謝の念を込めて（あの世へ）送る祈りの場であることなどすべてを敬う氣持ちを忘れずに持ち続ければ争いに通ずることはないでしょう。

豊かさとは心の豊かさを學ぶことであり私たち日本人は縄文時代より素晴らしい文明を築いています。日本に生まれたこと、日本人であることに誇りをもって日々大切に過ごしたいと強く感じました。

高山の秋
収穫に励む人々手を休め薄雪積もる遠山を眺む

大和心とは何ぞや？

（（株）利他創造　石部大史）

今回の講演では「大和心とは何ぞや？」ということを深く考えることが多く、講演やさまざまな議論の中で賛同できる

もの、腑に落ちないもの両方感じながら、改めて日本人の根っこを再確認できて改めて感謝申し上げます。

歴代天皇の祈りの話では、民を思い、被災地や戦災地はじめ各地を回られて語られたお話に、頭で考えたことや論理ではない、心からの言葉の通じ合いという伝統が息づいているというお話が特に印象に残りました。優れたリーダーの共通点は「現場の声に耳を傾けて、現場の人たちの困りごとに寄り添える人」ということに異論はないかと思いますが、そうした「現場の民の声」を優先して、寄り添える天皇と共に歩めたことは改めて日本の幸福だと感じました。

縄文人の生活、野球日本代表など、さまざまな事例を挙げる中で共通して議論に出てきた「大和心とは？」の問いの中では、相手への敬意、現場の民の声に耳を傾けること、上下のものがむつまじく論じあって高め合うことなどが腑に落ちました。

「民心に寄り添い、民の共感が広がる言葉で繋がる」という和の心の伝統は、自分も大事にして実践すべきと肝に銘じたいです。

阪神タイガース優勝決定試合を見届けて
甲子園高く掲げし優勝旗願ひ届きて　心安かる
亡き友に捧ぐ白星優勝の喜びわかつ　姿誇らし
日本保守党結党のニュースを聞きて
同胞(はらから)の憂ひを聞きて立ち上がる新党の声届けと願ふ

まず日本人なら正しい日本史を学ぶことが第一

（自営業　薗田美浩）

毎回ズームにより開催されており、久しぶりの面談による開催であった。やはり対面により討論するのは生の声、感情、表情、しぐさが直接伝わってきて良いものである。懇親会も含め、数か月に1度は面談による開催をやっていただきたい。

竹本忠雄先生については91歳という年齢で心身とも溌剌としていることに驚いた。私もこうありたい。内容についてはよく理解できていないと思うが、霊性、水鏡、暗在系、明在系について興味を持った。

伊勢雅臣先生の講演では歴代天皇の短歌に国民を思う願いが溢れており我々国民はもっと歴代天皇のことを知らねばならないと思う。それと歴史の現在の学校教育は修正せねばならないと考える。世界史が必修で日本史は任意というのはおかしい。まず日本人なら正しい日本史を学ぶことが第一で、次に世界史であろう。自国の歴史、文化を知らないで国が維持、発展できるはずがない。

確信に至るには
実体験が不可欠ではないのかとも思う

（絹田洋一）

かつて小林秀雄さんが「祠の石に亡くなった祖母の霊を見た」という柳田國男の話をされた。この話は不可思議な話、どう受け止めたらよいのか分からない話としてずっと私の中に残っていた。今回竹本忠雄先生はこの小林さんの話を端緒に、「目に見えないものの中にこそ大切なものがある」とされ、縄文、万葉、世阿弥、芭蕉らを経て皇后美智子様にまで受け継がれている日本人の死生観ー生と死は別物ではなく、繋がっているーについて語られた。

柳田國男の逸話は個人の特殊な体験と考えていたが、実は太古から日本人が持つ独特の感性から生まれたものであることがわかった。西欧の合理的思考が体の髄まで沁み込んでしまった私には、霊性の話が完全には得心できていない。しかし一方、私の中のどこかで納得しているところがあり、思い当たることもある。生死の真相に関わる深いお話に引き込まれつつ、最後の肝心のところがなかなか理解できない、先生のやうな確信には至らないという歯痒い思いであった。先生の自伝『未知よりの薔薇』を読むと、先生ご自身も若い頃は信じられなかったが、不可思議な現象をたびたび体験するうちに次第に霊性について確信するに至ったと述べられている。確信に至るには実体験が不可欠ではないのかとも思う。

竹本忠雄先生の御講義を聞きて

死後は無と考へをりしも生と死は繋がりてありと師は語られぬ

皇后美智子様の御歌

目に見えぬあまたの御霊に護られて続き来たりしこの国なるらむ

西郷隆盛の漢詩「獄中所感」

魂魄を留めて皇城を護らむとふ大人の御霊もここにあらむか

今後も研究を続けたい

（NPO法人 歴史人物学習館 伊勢雅臣）

新しい参加者も3人、来ていただいて、ありがたく存じます。ただ、竹本忠雄先生のご講義は、パソコンの音量不足で聞き取りにくく、申し訳ありませんでした。

竹本先生のご講義は、大和心、すなわち日本の霊性文明に関わるテーマでしたが、私自身の研究テーマと接する部分が所々あり、今後も研究を続けたいと思います。

九十路超えたる今もとつとつと説かるる我が師の思ひ深しも

幾代にも受け継ぎ来る御祖らの大和心を辿りゆきたし

一瞬で全てが分かるという経験

（天本和馬）

竹本忠雄先生の水鏡という象徴的なことばが印象的だった。見えない物を見る、或いは目に映ったものから更に奥深い物を見るということかと思った。能の世界にも触れられたが無表情の能面から演者が演じるその内面を見ることに通じると思った。美智子皇后さまの御歌が紹介され、御歌の解釈を先生の視点から解説された。美智子皇后様は何を見ておられた

のか、その一端をうかがい知れた。しかしうかがい知れない深い心象風景を見ておられたのだとあらためて思った。

後半の伊勢雅臣先生の講義では全てを敬う日本文化の例証として縄文文明の土偶の話が印象に残った。土偶の顔が貝や木の実などの食物を模しておりそれらに対する敬いを表しているという説明であった。

土偶は時代が重なるギリシャ彫刻と比較して全く写実的ではない。竹本先生の御講義から土偶の作者は水鏡に何を見ていたのかと思う。目には見えない何物かを見ていたのではないか、或いはそうではなく土偶に表現されたままの姿が見えていたのかもしれない。そのように考えると日本人の水鏡を通して物を見るということの意味をあらためて考えさせられた。思うに時代が下っても例えば仏像にしても決して写実的ではなく心の目で見ているのではなかろうか。或いは浮世絵も極端にデフォルメされているがやはり心の鏡に映ったままを絵にしているのであろう。

竹本先生は一瞬で全てが分かるという経験を水鏡という言葉で説明されたと感じた。それは曇りのない心の持ちようであると感じた。

竹本忠雄先生の御講義を拝聴して思ふ

水鏡てふ心に映るたまゆらの姿かたちを見逃すな我

曇りたる我をも映すか水鏡常に正しき身にしあらねば

福岡会場（太子会）

分断、断絶で見落とされてきたものを

最も大切にしてきたのがわが国です

（J-tech Transfer and Trading　小島尚貴）

合宿で感銘を受けた竹本忠雄先生のお話も、約一ヶ月を経て改めてビデオで視聴すると、まるで別のご講義であるかのように新鮮な学びがあふれており、新たな気付きもたくさんありました。

合宿と同じく印象に残ったのは愛国と憂国の違いです。歴代天皇の御製も憂国の情から読むと大御心がより深く偲べ、天皇陛下と国民の心の通い合いこそ、失われてはならない歴史の軸だと感じます。そして、この軸があればこそ、わが国では様々な命が結ばれ、つながり、隠れるという形で、独特のとらえ方をなされてきたのだと思いました。

分断、断絶は西洋的価値観の中核で、物事を見えやすく、分かりやすくしてくれますが、そこで見落とされてきたものを最も大切にしてきたのがわが国です。日本文化や日本の伝統的な職業観を西洋人がイリュージョンのように思うのも、西洋では分けて考えるものを日本では融和融合させるからで、その触媒作用を果たすのが大和心です。

今回も多くの学びと気付きがつながった一日でした。

世界が求めている転換を意識して学んでいきたい

（日章工業（株）　藤新成信）

竹本忠雄先生の御講義は、日本文明の本質に迫る大変大事なテーマであり、今後、「水鏡する」、即ち分断の思想から、転換、変移する、心の世界へ世界が求めている転換を意識して学んでいきたいと思います。亦、小柳志乃夫理事長のご出席をいただき、「歴代天皇の御製集」の御講話をいただき、誠に意義深い事業を残されましたこと心より感謝申し上げます。日本人として最も大切なことを国文研が担っていると改めて感じさせて頂きました。小島尚貴さんのご講話も有難うございました。学生と共に学び、企業と地域産業の再成の為に連携してまいりたいと思います。

忘れてしまっていることが多くありました

（坂本和代）

竹本忠雄先生のビデオを拝見して、忘れてしまっていることが多くありました。

美智子皇后の御歌

「生命あるもののかなしさ早春の光のなかに揺り蚊の舞ふ」で日本の思想では死はない、隠れている、に大和の心を感じました。

「水鏡する」で鏡の意味が、見えないものまで写す。とても深いと感じました。

コスパ病の小島尚貴講師の話も人事ではなく自分たちの生活に関係あり。日本の将来のためにも、人にすすめ、買物にも気をつけます。

少しでも学び前進してまいりたい

（折尾愛真高校　福田章枝）

一　竹本忠雄先生の講演

御歌を通して初めて気づかされることが多くあった。犠牲というのは日本にしかない。生死をこえているという言葉は心に残っている。聖書の御言葉の中に見えないものに心を注ぐこと、死は決して終りではないということばがあり、共通していると思った。

世界の四大文明の起こりがあるが、日本だけが２６８３年続いてきている国であり、国の歴史を子供たちへと伝えていく努力をすることが大切であると考えている。

今の時代に必要なもの、大和心が大切であるということを改めて教えられた。

二　歴代天皇の御製集ができるまでのお話をお聞きして身近な人たちへ紹介してまいりたい。

三　小島尚貴様のお話をお聞きして、日本と外国の常識が違

うことより私たち日本人が劣化していると思った。日本の伝統技術、文化、このようなものをしっかりと伝え続けていく努力が必要であると思った。

全体を通して、大変大きな励みになりました。日本のことをほとんど理解していない状態ですが、少しでも学び前進してまいりたいです。

もう一度じっくりお聞きしたい

（武田真理子）

竹本忠雄先生のご講演は、大変難解ながらも、皇后美智子さまの御歌を中心に、水鏡に写してみえない世界をみることが大和心のかたちと秘密にせまれるという、何とも不思議な興味深いお話でした。日本では古来？死ぬことを隠れると表現し、死ぬことは終わりではなく、またあらわれるかもしれないと、又、西洋のキリスト教との比較で西洋は断絶に行きつくが、やまとごころは知行に行きつく等、もう一度じっくりお聞きしたく思いました。又、小島尚貴先生の「脱コスパ病」のお話は、日本人全体が豊かになる消費や商業のあり方を深く考える機会となり、深い愛国、いえ憂国の情からつむがれるお話に感動、日本の将来に希望を感じました。小柳志乃夫理事長の編さんされた歴代天皇の御製集楽しみに読ませて頂きます。是非一家に一冊と願うところです。

毎日を大切に生きて行きたいと思います

（正田英樹）

竹本忠雄先生のお話をお聴きし、深く感動しました。日本にのみ辞世があり、返歌がある。霊性とは生と死を分けない、主観と客観を分けない。死は終わりでなく、再び顕れる。そして水鏡とは違う世界に入って行くこと。この世界唯一の国、日本に生まれ、何を成し遂げ、何を残せて行けるか、改めて深く考えさせられる時間となりました。小柳志乃夫理事長より歴代天皇の御製集のご説明がありましたが、歴史的な仕事であると感銘しました。小島尚貴さんのコスパ病と畳の著作は、社会に大きな反響を起しており、言葉の力が、気付きと行動を変えるものと感じ入りました。毎日を大切に生きて行きたいと思います。誠にありがとうございました。

（吉田喜久子）

今日は大変お世話になりありがとうございました。

大変ありがたく感じました

（小林　至）

竹本忠雄先生のビデオ講義を拝聴して、皇后美智子さまの御歌に触れて、御歌の中に流れる深い思い、歴史とのつながりを御歌に込められている事を知る事が出来、大変ありがた

く感じました。日本の歴史を鏡に写す精神、心のあり方が大切である事を感じました。なかなか、現実の社会の中では、得る事の出来ない経験が出来てありがたく思います。

大変ありがたく感じました

（長谷川大蔵）

本日はどうも有難うございました。私も25年ぶりの国文研でしたが、八王子の合宿に続き大変勉強になりました。貴重な時間を誠にありがとうございました。

消化不良で、もっとわかりたい

という思いを強くしました

（久々宮　章）

皇后美智子さま（現上皇后）による「終戦記念日」と題する御歌（海陸のいづへも知らず姿なきあまたの御霊国護るらむ）は、昭和六十三年にお詠みになった「終戦記念日」と題する、昭和天皇の御辞世とも申すべき御製（やすらけき世を祈りしもいまだならずくやしくもあるかきざしみゆれど）に対して不思議にも八年の歳月を経て「返しの歌」になってをり、竹本忠雄先生は目に見えない霊性で深くつながってゐると話され、はっとさせられました。また、美智子様のこの御歌を七十歳の時にフランス語に翻訳されたところ、フランスではセンチメンタルは軽蔑されるが、名だたる方々から深い感動の言葉が寄せられたとのお話も驚きでした。

「影を見るから鏡と言ったこと、青銅鏡のない時代は水に顔を映したこと、鏡への執着は日本人が一番」、「日本は大和心があったおかげで哲学的にならなかった」、「死を『隠れる』と表現したのはまた『顕れる』と日本人は信じたからだ」、「辞世があるのは日本だけ」、「能においては主役が現れる時は別な姿で出てくる、変わる場は鏡の間です」、「愛国という言葉はどの国にもあるが憂国という言葉は日本にしかない」、「アンドレマルローが那智の滝を見てアマテラス（天照）と叫んだこと」、「各々の水鏡をもちなさい」など多くの示唆を頂きましたが、消化不良で、もっとわかりたいといふ思ひを強くしました。

日頃リモート参加の短歌会（うたかい）の友に合宿で久しぶりに会ふ
友よりの開催の日問ふメール見て強き思ひの伝はり来るも
体調の整はぬ身をかへりみず友は来ませり講義聴かむと
辛き身を押してなほも聴かむとする友の姿の尊く思ふ

福岡会場（水天宮）

短歌を自分でも詠む事をもう一度始めたい

（サンリブ　平尾文洋）

今回の合宿は数十年ぶりの参加でした。最近あまり短歌に接する事がないので、久しぶりに短歌に触れて意味を追うだけで精一杯でした。そして日本人として短歌に触れて、自分でも詠む事をもう一度始めたいと思います。

忘れたる物の名前をジェスチャーで尋ぬる母は九十路になりぬ

（良永優理子）

深遠な日本の思想に改めて思ひを致す機会となった

（みどりヶ丘保育園　西山八郎）

今回、竹本忠雄先生のお話をお聞きし、深遠な日本の思想に改めて思ひを致す機会となった。日頃表面的な社会の動きにばかり目を奪はれがちになってゐることを反省させられた。人間を動かすもの、心の奥にひそむものの姿を今一度振り返り思ひ起こすことが大切だと思った。ありのまゝに自分を観察し、ありのまゝの自分、そして人々の姿を見つめ直すところに問題解決の糸口がみつかるのだと思ふ。

さらに長い歴史のなかで育まれてきた日本思想の個性についてもしっかりと捉へ直す必要があると思った。

竹本忠雄先生の御講義
目に見えぬ人の心に心よせ求めこられし姿たふとし

大変静かな時間でした

合宿教室に初めて参加させていただきました。竹本忠雄先生のご講話、「たまゆら」「古歌」「隠れる」「顕れる」等、ことばの響き、奥深い意味、大変静かな時間でした。日本文化の伝統を大事に大事につなげていけるように、日々過ごしてまいりたいと思っております。

今後共、よろしくお願い致します。

今朝の散歩での思い
朝陽あびたわわに稔る稲穂かな金色そまり光かがやく

色々感じて表現できる様になりたい

（谷原　絢）

古の人の様に大和心を持てる様な状態に心や気持ちを澄ませて、色々感じて表現できる様になりたいと思います。学びはいくつになっても大切だと感じております。生すびて顕れる。いのちだけでなく歌もそうありたいです。

竹本忠雄先生のお元気なお姿とお声に接し
懐しくみ声ききつつ思ひいづ清澄の池としびれ桜を

御歌にこめられた美智子様のお気持、
ご感想の深さには只々驚くばかりでした

（名和長泰）

竹本忠雄先生のご講義拝聴して大変衝撃的でした。「エピソディックなことではなく本質的なことを述べている」観点から御歌一つ一つをご紹介下さったことに大変感銘を受けました。それ以上に、御歌にこめられた美智子様のお気持、ご感想の深さには只々驚くばかりでした。

「返歌」の伝統、「みずかがみ」の意味、しかもそれが現在でも日本に生きづいてゐることのご紹介も心に響きました。「かくれること」、日本の死生観への言及にも大変啓発されました。

金色の光のなかの揺り蚊のかなしきいのちうたひたまへり

明りが点るそのとき

（小野吉宣）

一年ぶりに水天宮様にお参りし浩然の氣が甦りました。なつかしき旧友方にも小柳志乃夫理事長にも度々東京からお出頂き貴重な記念すべき一日となりました。竹本忠雄先生の御講話の中で特に上皇后様の

岬みな海照らさむと点るとき弓なして明るこの国ならむ

大御心の中に弓なして明るい日本が厳然として在る。守るべきそして帰るべき祖国日本が在るとうかがはれる。「国家の本質はイリュージョンではない。」明りが点るそのときに感じとり受け止めるべきでせう。

日本の役割

あまたなる兵失ふも国奪ふロシアを払ふウ国たたへむ

許されぬ侵略止めず塹壕を掘り固めたりウ国の中に

侵略を正当化するプーチンの顔みる度に怒り込みあぐ

小国のウクライナへの思ひ入れ他人事ならずニュース追ふなり

「領土とは我身なり」てふ師の君の言葉忘れじ北方領土よ

（小柳陽太郎先生）

ロシアには勝たせてならじ強奪は許されぬ事ゆめ忘るまじ

どこまでも戦ふつもりのプーチンに勝たせてならじウ国支へむ

ウクライナよ負けてならざりどこまでも憂ひを共に支へゆかめや

（小柳志乃夫）

変らざる野太き声にわが国の力のありど語りたまへり

（志賀建一郎先輩）

動画をば視聴したまふ先輩の後姿を美しと見つ

（合原俊光先輩）

衝撃を受けたものとなりました

（志賀建一郎）

今回の企画、有難うございました。

私にとって竹本忠雄先生のご講義内容は、岡潔先生の「日本的情緒について」と、小林秀雄先生の「信ずることと知ることと」に続く衝撃を受けたものとなりました。

我が国の歴史、伝統、古典の深さや重みを
しっかりと感じてゆこうと思います

（荘島慈恩塾　横畑雄基）

今回、竹本忠雄先生のお話を伺う機会を得まして、ありがとうございました。一言では理解しづらい部分も多いので、少しづつ〝日本への回帰〟を読み直していきます。

印象に残ったのは、「水鏡に映して、見えない世界を見る」という部分です。そして、国の本質は「感じ、受け取ること」であるとおっしゃっていました。国文研の学びの中で数多く触れてきた我が国の歴史、伝統、古典等を、今一度見つめ直し、自分もその深さや重みをしっかりと感じてゆこうと思います。

竹本忠雄先生の御講義を拝聴して
憂国の心こそ我が日の本に生れし人は持つと知りけり

「水鏡する」と言う言葉が
最も印象的に心の中に残りました

（折尾愛真短大　松田　隆）

「たまゆら」と題して皇后美智子さまの御歌を紹介されましたが、八番目のaとbの御歌の中の「光」そしてaの「揺り蚊の舞ふ」の言葉に心ひかれました。又、古歌の紹介があり、「隠れる」「顕れる」「往きて還る」「寂」と四つに分けられて古歌の底に流れるその精神と言うものが良くわかりました。そして最後に「水鏡する」と言う言葉が最も印象的に心の中に残りました。この言葉を胸に納めて生きていかなければならないと感じ入りました。竹本忠雄先生には個人的にもお世話になったことがあり、本日は本当に有り難うございました。

隠されしたまゆらの御歌いつの日か世に顕れんことを祈らん

宿題を頂いたと思っています

（新門司病院　森田仁士）

一年ぶりの皆様と顔を合わせての集り、楽しく充実した時間を過ごさせて戴きました。竹本忠雄先生の御講義は、むつかしかったです。しかし、大切なことを語られておられると強く感じました。私が大学一年生の時に聴講し、以後四十年かけて考えつづけた小林秀雄先生の「信ずることと知ること」と同じように、この竹本先生の御講義は、何年もかけて何回も再読再考する宿題を頂いたと思っています。

竹本忠雄先生の御講義を拝聴して
五十年経し小林大人の御講義の甦りきて懐かしきかな
数多なる師のみ教へに導かれ今ここにをるをただに畏む
宿題を竹本大人は示されり忘るることなくあたためゆかむ

上皇后美智子さまの御歌に沁み〳〵
心が動かされました

（合原俊光）

竹本忠雄先生より御紹介戴いた上皇妃殿下美智子さまの御歌に沁み〳〵心が動かされました。この世には目に見える世界と、目には見えない世界があるといふことに深く感動しました。国文研で短歌が重視される意義が改めて痛感させられます。

九十路越えなほ今も国民を導きたまふ師の君尊と
まなかひにみ顔を拝しやはらかきみ声聴きゆく心地せるかも

上皇后さまが具体的な国民の姿を詠まれるときにも
常に日本の国全体に視野が及んでをられる

（堀田眞澄）

竹本忠雄先生の御講義「大和心のかたちと秘密　現代文明の変貌と真向かいて」をビデオで聴講させて頂きました。竹本先生の御講義は初めてお聞きする者にとって大変難しいものでした。その中で断片的ですが私の印象に残ったいくつかのことについて述べます。

アンドレ・マルローが一九七四年五月、四度目でかつ最後の日本への旅に赴いた際に、マルローが那智の滝で「天照大神」の顕現をつぶやく姿を同行された先生が目撃されて衝撃を受けられたことを静かに語られた。常識的には見えるはずのないものが見えるような生き方のあることを指し示されたと思ひます。

次に、「たまゆら」と題して「皇后美智子さまの御歌」の数首を選んで講義された中で平成八年の終戦記念日の御歌

海陸のいづへを知らず姿なき　あまたの御霊国護るらむ

について、　昭和天皇の辞世とも呼ぶべき御製に対する反歌であると語られたことがとても印象的でした。　昭和天皇の御製が何かは確とは聞き取れませんでしたが

やすらけき世を祈りしもいまだならずくやしくもあるかきざしみゆれど（昭和六十三年）

かと思はれます。八年前の御闘病中の　昭和天皇の国の平安を願はれる思ひを受け止められた御歌と確信して解釈されたのだと思ひます。　上皇后様には平成八年歌会始の御歌に

日本列島田ごとの早苗そよぐらむ　今日わが君も御田にいでます

また、昭和五十二年、皇太子妃の時の歌会始の御歌に

岬みな海照らさむと点るとき　弓なして明るこの国ならむ

などがあります。上皇后さまが具体的な国民の姿を詠まれるときにも常に日本の国全体に視野が及んでをられる。それは皇太子妃の時から常に　上皇様に寄り添ひ、同じ思ひで生きて来られたといふことだと思ひます。そのことを竹本先生は「祈りの二重唱」と表現されたのだと思ひました。そして今回の竹本先生のご講義で　上皇后様のこの思ひは　昭和天皇

へ、ひいては歴代の皇室へと繋がってゐると教へて頂きました。有り難うございます。

竹本忠雄先生のご講義を聴きて

生と死をわかたず生きる生き方を大和の民は生きて来ますと

竹本忠雄先生のご講義を聞いて、所感を書きます。

上皇后様の御歌を拝して、人生の諸断面の折々に、実感された情景をうたわれてをられます。それが、枕詞等によってより一層、高次の精神世界に昇華されて、我々にもお示しになられている事を、本当にかたじけなく、また、慰められ、力づけられる思いです。

こうやって、綿々と受け継がれて来た、我々日本人、そして、世界の人々、生きとし生けるものに寄り添われている姿に、御皇室の祈りが、あるのではと拝察致しました。

恥ずかしい限りですが、小生も上皇后様に少しでも、喜んで頂けるように頑張ります。

小島尚貴さんの講義には、本当に力を頂きました。斬新な日々の営みからの切り込み、本当に、素晴らしいです。有難うございます。

長崎会場

一緒に塾生活を送った事を自慢に思へました

（元大村郵便局　橋本公明）

竹本忠雄先生は、美智子さまの御歌を通じて、死と生を分けない、霊性文明を指摘されました。柿本人麻呂の長歌を、美智子上皇后が、引き継いでをられるとのお言葉に、心動かされました。

小島尚貴先生の「自損型輸入」は、正しい国家観を持った、生き方、働き方の一致した、経済人を思ひました。占部賢志先輩、黒岩真一兄と、一緒に塾生活を送った事を自慢に思へました。

本当にかたじけなく、また、慰められ、

力づけられる思いです

（長崎市立西北小学校　奥村市郎）

「皇后宮美智子さま祈りの御歌」を

ぜひ読んでみようと思いました

（主婦　本多桃代）

美智子さまの御歌の奥深さに心打たれました。竹本忠雄先生の「皇后宮美智子さま祈りの御歌」をぜひ読んでみようと思いました。また、風姿花伝にも強く関心が高まりました。早速図書館に予約しました。読んでみたいと思い

ます。

上皇后様の御歌の解釈やそれに関わる秘話など改めて感動いたしました

（主婦　山川絹江）

今回竹本忠雄先生の貴重なご講演をいただき心より感謝致しております。先生のご著書『祈りの御歌』を拝読し感銘を受けておりました。上皇后様の御歌の解釈やそれに関わる秘話など改めて感動いたしました。又、日本文化の深き素晴らしさ、日本人の死生観等知る事が出来ました。

上皇后様の〝うた〟に、和歌のしらべがある

（元小学校校長　本多留男）

竹本忠雄先生から色々と教えていただきました。その中で、「まくらことば」について、あらためて大切さを学びました。短歌の本では、「枕詞」を訳さなくともよいと解説しているものが多いです。しかし、枕詞の中にこそ〝うた〟の神髄がこめられていることが多いとわかりました。枕ことばをしることで、短歌と和歌のちがいがわかったように思います。上皇后様の〝うた〟に、和歌のしらべがあることを〝たまゆら〟の講義よりわかりました。

長崎会場での開催に感謝します

（元小学校校長　山川洋一）

竹本忠雄先生の講義について

和歌をもとにして、日本文化と西洋文化の違いを知ることができたすばらしい講義でした。日本文化の根底にある和歌の心を改めて深める機会ともなり、日本文化が、今後の変わりゆく世界の中で、見直される時代が来ることを予感させる話でもあったと思います。

日本文化が、世界的にアニメなどでも、人気を博していますが、その根底に大和心があることが感じられ、今後、和歌による日本文化をさらに深めていきたいと思います。

地方にあっても、竹本先生の講義にふれることが出来る、長崎会場での開催に感謝します。

小島尚貴先生の講義について

コスパ病について初めて知りましたが、外国製品の安売り戦略に乗せられることなく、しっかり日本文化を守っていきたいと思います。

熊本会場

人生の幅を広げられる貴重な時間となりました

（司法書士　井上慶一）

ひさしぶりに和歌と触れ合うことができました。慌ただしい日々の中で、このような機会は人生の幅を広げられる貴重な時間となりました。和歌についての知識が足りず、講義を通して理解を深めることは中々難しかったのですが、美智子上皇后陛下の御歌に込められた日本や日本国民への深い思いに触れ、心が洗われるような気持になりました。古歌も同様、一つ一つの言葉のもつ意味を調べながら進めていかないと理解することはできませんでしたが、その時代に生きた人の思いに触れ、人の持つ気持ちや感情は千年以上前であっても、今を生きる人たちと何一つ変わらないのだと感じました。このような機会をいただきありがとうございました。

国民にそそがれる慈しみの心

（会社員　平田裕英）

竹本忠雄先生の御講義は大変難しいお話であったが、我が国の文化の本質を理論的に語られるのではなく、上皇后陛下の御歌や和歌を通じて輪郭を浮かび上がらせてをられると感じた。文化とは一概に定義されるものではなく、斯様に言葉や事蹟の積み重ねでしか理解できないものであり、感じ取るしかないものである。

外国では、この文化が断絶してゐるといふご指摘は重要であると感じた。昨今の政治的・社会的な変革の動きが断絶を企図したものであるか否か、断絶に繋がるものであるか否か、見極めて処していく必要があるが、そのためには我が国の文化・伝統に数多く触れて感覚を呼び覚ます必要があると感じた。

有意義な時間、懐かしい時間となりました

（八代第二中学校教頭　坂本太郎）

大変お世話になりました。久しぶりに学生時代の頃を思い出しました。それぞれ歳をとり、それ相応の立場となり、頑張っておられる事も分かり、有意義な時間、懐かしい時間となりました。次は他のメンバーも参加出来る様に協力致します。

得難い集いとなりました

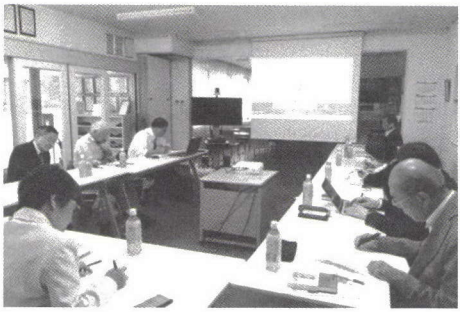
（八代社会福祉協議会　吉村えり子）

久方ぶりに我が家に集まっての国文研の合宿でした。裏方の準備で講義等は聞けませんでしたが、懐かしい方々にお会いでき得難い集いとなりました。

名残り惜しそうに帰路に着く後ろ姿

（㈱ミユキコーポレーション　吉村浩之）

今回は八代市在住のメンバーに呼び掛けて実施しましたが、高藤誠君が熊大の学科新設の編入試験監督の為、急遽参加できませんでした。又、寺岡純伸君、宮田正男君の欠席は残念でした。竹本忠雄先生の講義を聴講した後、午後一時から夜の九時まで皆の話を聞きました。それでも話たりない様子で、名残り惜しそうに帰路に着く後ろ姿に忘れ得ぬ集まりとなりました。



福岡（太子会）会場１

福岡（太子会）会場２

福岡会場（水天宮）

長崎会場２

長崎会場１

あとがき

新年を迎へ、寒さも一層厳しくなって参りました。

皆様にはその後如何お過しでせうか。

東京都八王子市「大学生セミナーハウス」主会場での「合宿教室」および各地方会場での録画に基づく「集合研修」から四～二カ月経ちました。この度やうやくこの「感想文集」を、皆様のお手元にお届けできる運びとなりました。

この文集は、「合宿教室」、「集合研修」後、参加者に走り書きしていただいた感想文と、合宿中に創作した短歌を合はせて収録したものです。

編集作業は、皆さんの感想文を添削・編集する作業から始まりました。参加者お一人お一人のお心こもる文章と歌を丹念に読み返し、文字を正確にたどる作業は、皆さんの瑞々しい心の動きに触れる喜びを感じることができる、貴重なひと時でした。

本感想文集の編集に際しましては、以下の方針で作業に当たりました。

一　「感想文」

執筆者の原文を尊重し、お心の内が最もよく表れてゐる箇所を摘要し、表題を付けました。文意が不明瞭な場合は、執筆者の気持ちを想像しながら、原文の趣が損なはれないやう加筆しました。「仮名遣ひ」については、原文を尊重し、現代仮名遣ひ、歴史的仮名遣ひどちらかに統一してゐます。漢字および文法上の誤りは訂正してをります。

二　「短歌」

主会場での創作短歌は、全体批評で手直しされたものを「短歌詠草」に収めました。主会場、地方会場の感想文執筆時の創作短歌は感想文に併せて載せてをります。文字表記は、すべて歴史的仮名遣ひにそろへ、文法上の誤りは、訂正してをります。

主会場での講義の録画と写真撮影は（株）アイセルネットワークの最知浩一さんにお世話になりました。

本感想文集を読み進む中で、様々な感動が甦ってくることでせう。学びを続けていっていただければと思ひます。　（北濱　道記）

第六十八回「合宿教室」（主会場・地方会場）感想文集

非売品

令和六年一月十日発行

編集兼発行者

公益社団法人　国民文化研究会

理事長　小柳志乃夫

編集　北濱道

東京都渋谷区東一―十三―一―四〇二号

〒一五〇―〇〇一一

電話　〇三―五四六八―六二三〇

FAX　〇三―五四六八―一四七〇